和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 9

－平成14年度（2002年度）・15年度（2003年度）－

和歌山城跡 第9次調査

和坂南垣内1号墳

2006

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序　文

本書は、当財団が平成14年度（2002年度）及び15年度（2003年度）の2年間に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、新発見の遺跡である和坂南垣内古墳群の調査では、この古墳群が4基の円墳から成り、埋葬施設に大型の横穴式石室をもつことなどが明らかになりました。また、車駕之古址古墳の確認調査では、これまで不明確であった古墳の前方部南西隅角部や外堤の位置を確認し、古墳の全体形を明らかにすることができました。和歌山城の調査では、内掘に架けられた「御橋廊下」関係の遺構について3時期分を確認し、城下町の調査で紀州藩家老水野家の屋敷跡の礎石建物や石組溝などを検出し、多くの遺跡内容を明らかにすることができました。

以上、当財団の調査による新たな学術調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成18年（2006年）3月31日

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長　井　邉　祐　二

例　言

1．本書は、平成14年度（2002年度）・15年度（2003年度）に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載するものである。

2．本書に掲載の調査については、既に報告書を刊行したものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。

3．本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は北野隆亮が行った。

4．埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成を行った担当者は以下の通りである。

埋蔵文化財発掘調査

【平成14年度（2002年度）・平成15年度（2003年度）】

学芸員　北野隆亮
学芸員　井馬好英
学芸員　奥村　薫
学芸員　髙橋方紀
学芸員　藤藪勝則
学芸員　川口修実

年報作成

【平成17年度（2005年度）】

学芸員　北野隆亮
学芸員　井馬好英
学芸員　奥村　薫
学芸員　藤藪勝則

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに

1．平成14年度（2002年度）の調査……1

2．平成15年度（2003年度）の調査……2

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

【平成14年度（2002年度)】

1．秋月遺跡第10次調査……4

2．史跡和歌山城第27次調査……8

3．和歌山城跡第9次調査……12

4．津秦Ⅱ遺跡発掘調査……16

5．旧中筋家住宅第4次調査……20

6．車駕之古址古墳第6次調査……24

【平成15年度（2003年度)】

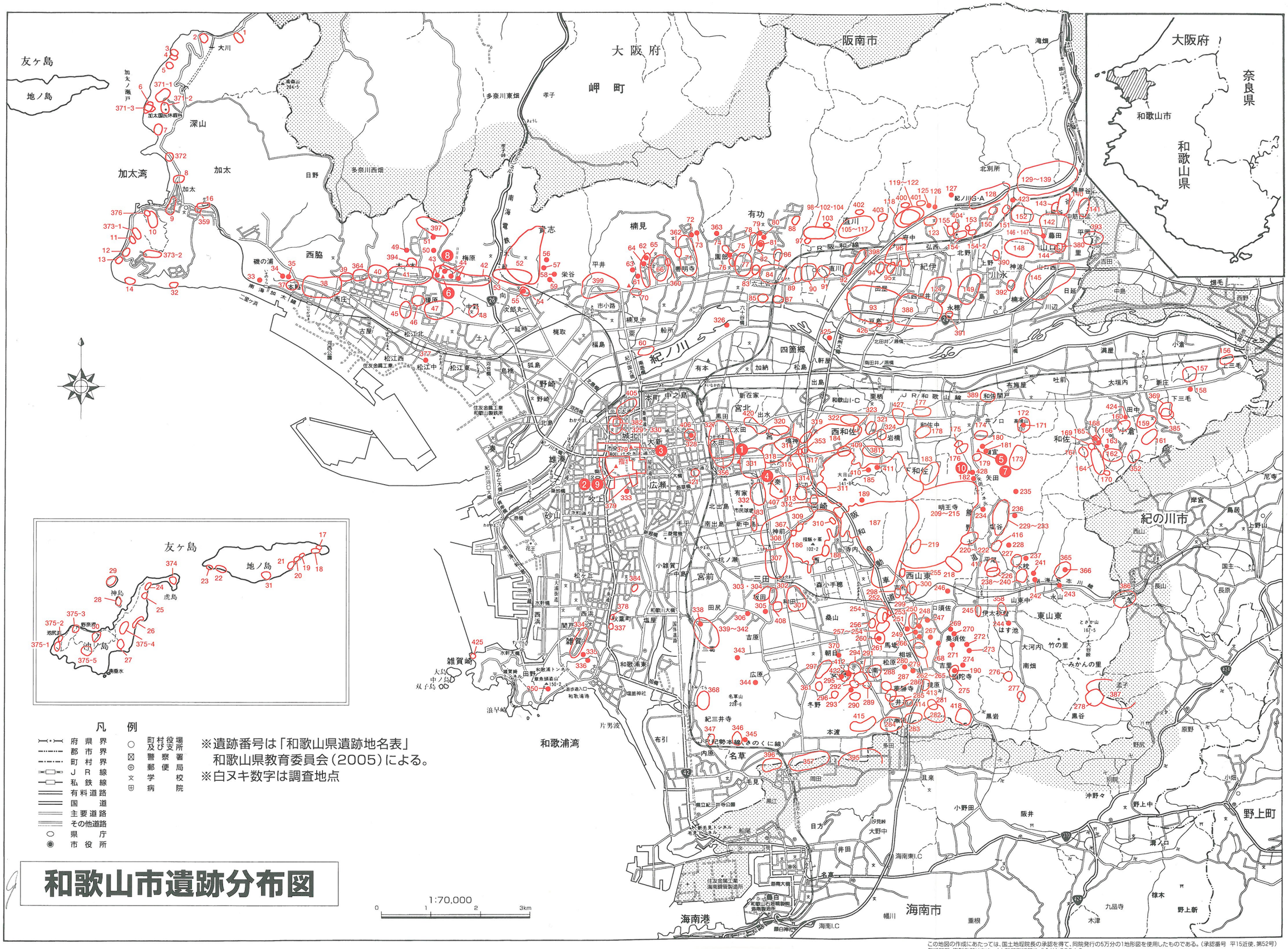
7．旧中筋家住宅第5次調査……28

8．木ノ本Ⅲ遺跡第10次調査……34

9．史跡和歌山城第28次調査……40

10．和坂南垣内古墳群発掘調査……44

Ⅲ．普及啓発活動……50



凡例

- 府県界
- 郡市界
- 町村界
- JR線
- 私鉄線
- 有料道路
- 国道
- 主要道路
- その他道路
- 県庁
- 市役所
- 役場及び村役場
- 警察署
- 郵便局
- 学校
- 病院

※遺跡番号は「和歌山県遺跡地名表」
和歌山県教育委員会（2005）による。
※白ヌキ数字は調査地点

和歌山市遺跡分布図

1:70,000
0 1 2 3km

この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を使用したものである。（承認番号　平15近使、第52号）
無断転載・複製を禁じます。〈中和印刷紙器株式会社〉2004.3

和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会〈2005年〉より作成。）

遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称
1	報恩講寺遺跡	49	城山古墳	105~117	直川八幡山古墳群	174	禰宜Ⅰ遺跡	261	馬場遺跡	310	森小手穂埴輪窯跡	362	鳴滝遺跡	398	府中Ⅳ遺跡
2	大川西方遺跡	50	権現山1号墳	118	八王寺山古墳群	175	禰宜Ⅱ遺跡	262~265	東池古墳群	311	大日山Ⅰ遺跡	363	園部円山古墳	399	平井遺跡
2	藻江遺跡	51	権現山2号墳	119	橘谷Ⅰ遺跡	176	禰宜貝塚	266	吉里銅鐸出土地	312	井辺Ⅰ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	400	深谷池北遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	52	高芝遺跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	177	河南中学校北方遺跡	267	小山古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	365	永山遺跡	401	名草池北遺跡
5	水谷遺跡	53	高芝古墳群	121	橘谷Ⅲ遺跡	178	和佐中遺跡	268	奥須佐窯跡	314	鳴神Ⅱ遺跡	366	永山古墳	402	湯谷池西遺跡
6	男良の谷遺跡	54	栄谷貝塚	122	橘谷銅鐸出土地	179	和佐寺跡	269	円満寺古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	403	平野池南遺跡
7	深山遺跡	55	貴志古墳	123	弘西遺跡	180·181	禰宜古墳群	270	峯古墳	316	鳴神Ⅳ遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
8	大谷川遺跡	56	川原崎遺跡	124	北田井遺跡	182	和坂古墳	271	西光寺窯跡	317	鳴神貝塚	369	奥山田遺跡	405	山吹丁遺跡
9	加太遺跡	57~59	川原崎古墳群	125~127	別所古墳群	183	和佐古墳群	272	吉里1号窯跡	318	鳴神Ⅴ遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友田町遺跡
10	加太南遺跡	60	国有本遺跡	128	上野古墳群	184	花山古墳群	273	吉里2号窯跡	319	音浦遺跡	371	深山要塞跡	407	津秦Ⅱ遺跡
11	平の谷遺跡	61	大谷古墳	129~139	山口古墳群	185	岩橋千塚古墳群	274	頭陀寺古墳	320	鳴神Ⅵ遺跡	371-1	深山第1砲台跡	408	和田Ⅱ遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	62·64·65	晒山古墳群	140	山口廃寺跡	186	井辺前山古墳群	275	頭陀寺遺跡	321	岩橋遺跡	371-2	深山第2砲台跡	409	岩橋Ⅲ遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	63	慶円寺裏山古墳	141	中筋日延遺跡	187	寺内古墳群	276	大将軍窯跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	371-3	男良砲台跡	410	前山B226号墳
14	船出遺跡	66	雨が谷古墳群	142	山口遺跡	188	森小手穂遺跡	277	有ノ木窯跡	323	栗栖Ⅱ遺跡	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
16	加太駅北方遺跡	70	楠見遺跡	143	谷遺跡	189	寺内ナイフ形石器出土地	278	宝光寺跡	324	高橋神社遺跡	373-1·2	田倉崎砲台跡	412	城ノ前1号墳
17	藻崎北浜遺跡	71	鳴滝古墳群	144	里遺跡	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	279·280	松原古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
18	藻崎南浜遺跡	72	奥出古墳	145	川辺遺跡	209~215	山東古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	375	友ヶ島要塞跡	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
19	藻崎西浜遺跡	73	有功経塚	146	藤田古墳	218	若林古墳群	282	滝ヶ峯遺跡	327	太田·黒田遺跡	375-1	友ヶ島第1砲台跡	415	本渡遺跡
20	神前東浜遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	147	硲古墳	219	吉礼砂羅谷窯跡	283	薬勝寺南山古墳群	328	吉田窯跡	375-2	友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
21	神前西浜遺跡	75	園部古墳	148	藤田遺跡	220~222	平尾古墳群	284	仁井辺遺跡	329	鷺ノ森遺跡	375-3	友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
22	屋敷浜遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	149	宇田森遺跡	226	楠古墳群	285	薬勝寺跡	330	鷺ノ森窯跡	375-4	友ヶ島第4砲台跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	77	有功遺跡	150	上野廃寺跡（紀伊薬師寺跡）	227	足守神社古墳群	286	薬勝寺遺跡	331	秋月遺跡	375-5	友ヶ島第5砲台跡	420	太田城水攻め堤跡
24	一色谷遺跡	78	池田遺跡	151	上野遺跡	228	赤山古墳	287	松原Ⅰ遺跡	332	津秦遺跡	376	行者堂東遺跡	421	木広町遺跡
25	柏の浜遺跡	79	有功古墳	152	上黒谷遺跡	229~233	塩谷古墳群	288	松原Ⅱ遺跡	333	岡の里古墳	377	松江経塚	422	朝日蔵骨器出土地
26	深蛇池遺跡	80	大同寺墳墓	153	北野窯跡	234	新出古墳	289	薬師谷遺跡	334	関戸遺跡	378	猊口石岩陰遺跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡
27	垂水遺跡	81	大同寺古墳	154	北野遺跡	235	明王寺経塚	290	江南遺跡	335	関戸古墳	379	和歌山城跡	424	東田中遺跡
28	神島遺跡	82	大同寺遺跡	154-2	北野Ⅱ遺跡	236	矢田古墳	291	曽垣田遺跡	336	天神山古墳	380	山口御殿跡	425	雑賀崎台場跡
29	沖の島北方海底遺跡	83	法然寺遺跡	155	若宮池遺跡	237	北池古墳	292	曽垣田Ⅱ遺跡	337	秋葉山貝塚	381	岩橋Ⅱ遺跡	426	小豆島西遺跡
30	野奈浦遺跡	84	六十谷遺跡	156	上三毛遺跡	238~240	殿山古墳群	293	曽垣田古墳	338	アンドの鼻古墳	382	本願寺跡	427	岩橋高柳遺跡
31	ハイブの浦遺跡	85	和田遺跡	157	下三毛遺跡	241	土井山古墳	294	城の前Ⅱ遺跡	339~342	三田古墳群	383	神前Ⅱ遺跡	428	和坂南垣内古墳群
32	浜遺跡	86	西辻遺跡	158	小山古墳	242	丸山古墳	295	城の前Ⅰ遺跡	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡	指1	史跡和歌山城
33~35	磯の浦古墳群	87	川口遺跡	159	寺山古墳群	243	高岡古墳	296	大池遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群		
37	磯脇遺跡	88	六十谷古墳群	160	東国山古墳群	244	桜山古墳	297	赤津古墳群	345	内原古墳	386	大池遺跡		
38	西庄遺跡	89	直川遺跡	161	宮山古墳群	245	伊太祈曽神社古墳群	298	吉礼貝塚	346	内原遺跡	387	大旗山城跡		
39	平の下遺跡	90	直川廃寺跡（明光寺跡）	162·163	小倉古墳群	246	チショ古墳	299	西吉礼遺跡	347	名草貝塚	388	西田井遺跡		
40	木ノ本Ⅰ遺跡	91	高井遺跡	164	明楽古墳群	247~249	城ヶ森古墳群	300	東吉礼遺跡	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡		
41	木ノ本Ⅱ遺跡	92	鳥井遺跡	165·166	小倉神社古墳群	250	城ヶ森遺跡	301	和田遺跡	352	金谷廃寺跡	390	神波遺跡		
42	木ノ本Ⅲ遺跡	93	田屋遺跡	167	モント古墳群	251	相坂古墳	302	和田岩坪遺跡	353	興徳寺跡	391	永穂遺跡		
43	木ノ本経塚	94	府中Ⅱ遺跡	168	小倉神社境内遺跡	252·253	千石山古墳群	303·304	和田古墳群	356	太田城跡	392	楠本遺跡		
44	釜山古墳群	95	府中Ⅲ遺跡	169	金谷遺跡	254	菖蒲谷遺跡	305	竈山神社古墳	357	山崎山古墳群	393	吉田遺跡		
45	木本小学校Ⅰ遺跡	96	府中遺跡	170	奥池遺跡	255	吉礼Ⅲ遺跡	306	坂田地蔵山古墳	358	山東中遺跡	394	城山遺跡		
46	木本小学校Ⅱ遺跡	97	北山Ⅰ遺跡	171	高積山遺跡	256	千石山遺跡	307	神前遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡村遺跡		
47	榎原遺跡	98~102·104	北山古墳群	172	薬徳寺跡	257~259	井戸古墳群	308	井辺遺跡	360	雨が谷遺跡	396	室山古墳群		
48	中野遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	173	城ヶ峯城跡	260	馬場古墳群	309	岡崎縄文遺跡	361	冬野遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡		

Ⅰ．はじめに

1．平成14年度（2002年度）の調査

和歌山市における平成14年度（2002年度）の本財団の発掘調査受託事業は6件である。

調査に至った原因としては、事務所ビル建設の民間受託が1件に対して市道拡幅などの公共的な調査が5件を数え、前年度に比べ民間受託が減少し、公共関係の調査が主体を占めた。

公共関係の調査では和歌山城御橋廓下などの史跡整備関連調査のほか、国の重要文化財である旧中筋家住宅の解体修理工事に伴う調査などが行われた。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

弥生時代

弥生時代については、秋月遺跡第10次調査において中期中葉から後葉の土坑3基、土器棺墓1基などを検出した。調査地は秋月遺跡範囲内の西側部分であったが、秋月遺跡には当該期の遺構は調査地周辺以外にみられないことなどから、北西に隣接して位置する太田･黒田遺跡との関連で位置付けられるとした。調査地周辺の土地利用が中期中葉以降に本格化することや太田･黒田遺跡の墓域が遺跡縁辺部にまで及び、中期段階の集落の範囲が調査地周辺まで拡大していることなどを明らかにすることができた。

古墳時代

古墳時代については、車駕之古址古墳第6次調査で古墳の前方部南西隅、外堤、及び周濠を検出し、従来の古墳復原案を修正することができた。

秋月遺跡第10次調査において、土坑から滑石製紡錘車が出土した。また、津秦Ⅱ遺跡では、前期に埋没したとみられる河道や溝を検出した。

【2002年度調査一覧表】

番号	調　査　名	原　　因	調査期間	面積(㎡)	調　査　概　要	担当者名
1	秋月遺跡第10次調査	遺跡確認	7月～8月	70	弥生時代の土器棺墓や中世の集落跡を検出。 滑石製紡錘車が出土。	川口
2	史跡和歌山城第27次調査	史跡整備	9月～11月	200	大奥の屋敷地と外側を区画する漆喰塀や石垣、溝などを確認。	藤藪
3	和歌山城跡第9次調査	事務所ビル建設	9月～10月	160	紀州藩家老水野家の屋敷地に当たり、4時期の生活面を確認。	井馬
4	津秦Ⅱ遺跡発掘調査	市道建設	11月～12月	120	古墳時代前期に埋没したと見られる河道や溝、鎌倉時代の水田、室町時代の噴砂などを確認。	奥村
5	旧中筋家住宅第4次調査	解体修理	11月	50	主屋を中心とした敷地の造成状況を確認。	高橋
6	車駕之古址古墳第6次調査	遺跡確認	12月～2月	100	古墳前方部南西隅角、外堤の検出。 中世以降における水田化の過程を確認。	川口

奈良～平安時代

奈良時代の遺構として、秋月遺跡第10次調査で方形のホリカタをもつ柱穴を2基検出した。また、土師器杯蓋、須恵器杯、黒色土器、瓦などが出土しており、周辺の過去の調査でも当該時期の遺構が検出されていることなどから、調査地において削平された遺構の存在が想定された。

鎌倉～室町時代

秋月遺跡第10次調査において、鎌倉時代の溝、土坑、石組井戸、室町時代の土坑や溝など多くの遺構を検出し、土師器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器、中国製青磁、瓦などが出土した。

車駕之古址古墳第6次調査では中世の水田面を2面検出した。水田遺構は出土遺物から、中世前期（平安時代後期～鎌倉時代）と中世後期（室町時代）の時期のものと考えられた。また、津秦Ⅱ遺跡においても鎌倉時代の水田面を確認した他、室町時代の粘土採掘坑や地震による液状化現象によって形成された噴砂痕を検出した。

江戸時代

江戸時代の調査としては、史跡和歌山城第27次調査で二の丸において大奥の屋敷地と外側を区画する漆喰塀や石垣、石組溝などを確認した。これらの遺構群は、絵図と発掘調査による遺構配置がよく符号した資料であると考えられた。また、和歌山城下町の調査としては、三の丸跡に位置する紀州藩家老水野家屋敷跡を和歌山城跡第9次として調査を実施した。調査では礎石建物や石組溝などの屋敷地に関わる遺構を検出し、4時期の変遷を確認した。

旧中筋家住宅において第4次調査を行い、前身建物に関する遺構を検出し、母屋を中心とした敷地の造成状況などを確認した。

2．平成15年度（2003年度）の調査

和歌山市における平成15年度（2003年度）の本財団の発掘調査受託事業は4件である。

調査に至った原因としては、宅地造成の民間受託が1件に対して市道拡幅などの公共的な調査が3件を数え、前年度同様公共的な調査が主体を占めたことになる。

公共関係の調査では和歌山城御橋廊下史跡整備関連調査のほか、国の重要文化財である旧中筋家住宅の解体修理工事に伴う調査、和坂南垣内古墳群における石室崩壊抑止及び遺跡確認のための調査を行った。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

古墳時代

古墳時代については、新発見の遺跡である和坂南垣内古墳群において、円墳4基からなる古墳群であり、墳形や墳丘･石室規模、岩橋千塚古墳群と同型の埋葬施設を採用していることなどを確認した。特に、1号墳の横穴式石室は規模の大きいもので、棺台・棺障・仕切石をもつ例であり、玄

室中央部において検出した主軸に平行する左右１組の仕切石は和歌山県内では稀少例である。

鎌倉時代

木ノ本Ⅲ遺跡第10次調査において、鎌倉時代の土坑などを検出した。土坑のうち遺構底面に焼土や炭が堆積するものがあり、中世の埋葬行為にかかわる火葬遺構の可能性がある。

和坂南垣内古墳群１号墳の横穴式石室羨道部から瓦器椀・皿、土師器皿が出土した。中世における石室再利用の結果と考えられる。

江戸時代

江戸時代の調査は、「御橋廊下」の西の丸側取り付き部分の調査を行い、火災を受けた砂岩礎石列（８基）などを確認した。

旧中筋家住宅第５次調査において、19世紀後半代に行われた前身建物から現敷地への拡張と造成の過程などを確認した。

【2003年度調査一覧表】

番号	調　査　名	原　　因	調査期間	面積(㎡)	調　査　概　要	担当者名
7	旧中筋家住宅第5次調査	解体修理	８月～９月	31	前身建物段階から現敷地への拡張と、造成過程を確認。	川口
8	木ノ本Ⅲ遺跡第10次調査	宅地造成	８月～10月	90	鎌倉時代の土坑を確認。焼土面の上に炭が厚く堆積していることから、墓の可能性がある。	藤薮
9	史跡和歌山城第28次調査	史跡整備	10月～12月	200	御橋廊下の西の丸側取り付き部分の調査で、火災を受けた砂岩礎石列(礎石8基)などを確認。	髙橋
10	和坂南垣内古墳群発掘調査	崩壊抑止	12月～３月	54 (6,000㎡対象)	４基の円墳を確認、１号墳の横穴式石室は棺台・棺障・仕切石をもつことを確認した。特に、玄室中央部で主軸に平行する左右１組の仕切石を検出したが、和歌山県内では希少な例である。	川口

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要
【平成14年度（2002年度）】

1．秋月（あきづき）遺跡第10次調査

調 査 地　和歌山市太田155-2番地

調査面積　70㎡

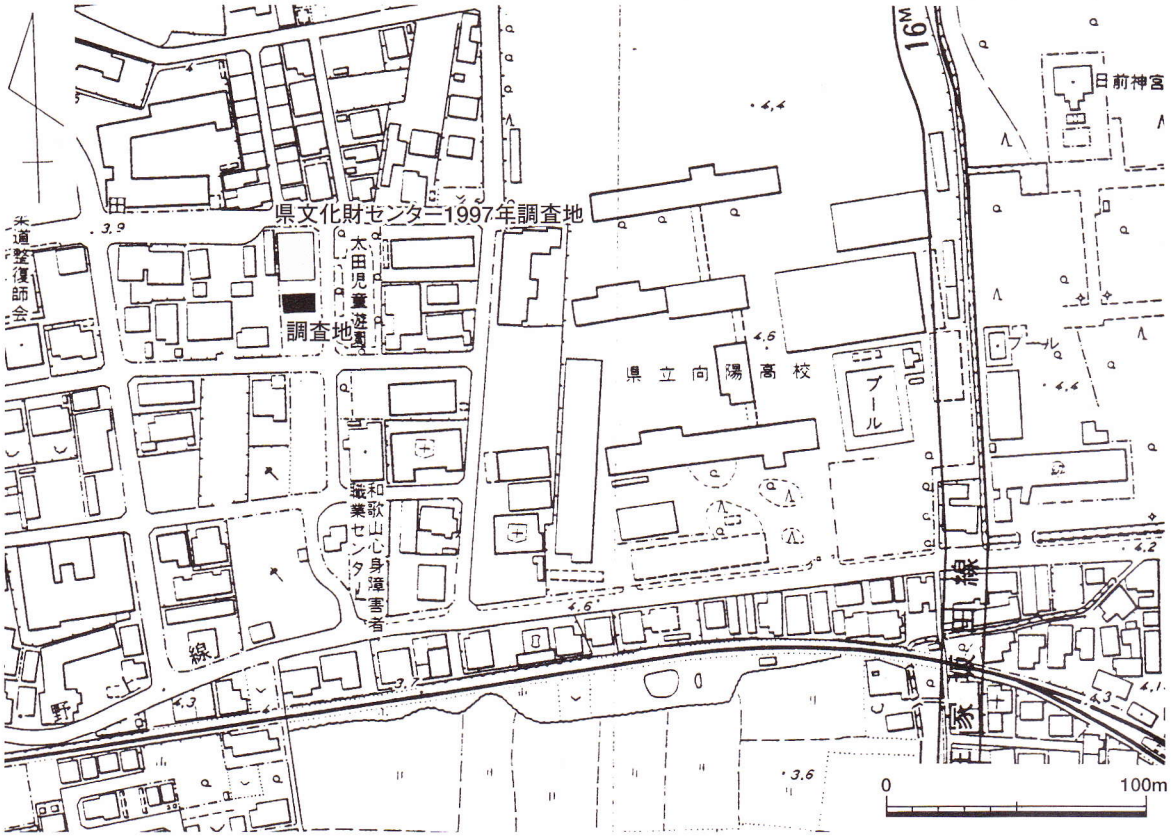
位置と環境

秋月遺跡は紀ノ川南岸の微高地上に立地し、紀伊国の一宮である日前・国懸神宮の周辺にひろがる遺跡である。本遺跡は、弥生時代から江戸時代にわたる大規模な複合遺跡として周知されており、県内最古とされる古墳時代前期の前方後円墳が検出されたことでも著名な遺跡である。また、本遺跡の南側は河南条里と呼称され、紀ノ川南岸部でも条里地割が良好に残っている地域である。

今回の調査は、和歌山市太田155-2番地において個人住宅が建築されることになり、工事に先立つ発掘調査を実施することになった。調査対象地は秋月遺跡の範囲内でも西部にあたり、1997年に財団法人和歌山県文化財センターが調査を実施した調査地の南側隣接地にあたる。この調査では部分的に遺存しているものを含め、弥生時代中期から江戸時代にかけて5面の遺構面が確認されており、本調査においても複数の遺構面の存在と中世を主とした遺構・遺物の検出が予想された。

調査内容

当調査地の基本層序については、近現代の造成土下に旧耕作土（第1層）、その下層に近世以降の遺物包含層（第2層）、中世前期の遺物包含層（第3層）、弥生時代の遺物包含層（第4層）がそ



調査位置図

れぞれ堆積する。遺構については撹乱が著しい調査区南西部を除くほぼ全面において３面の遺構面を確認した（第１～３遺構面）。

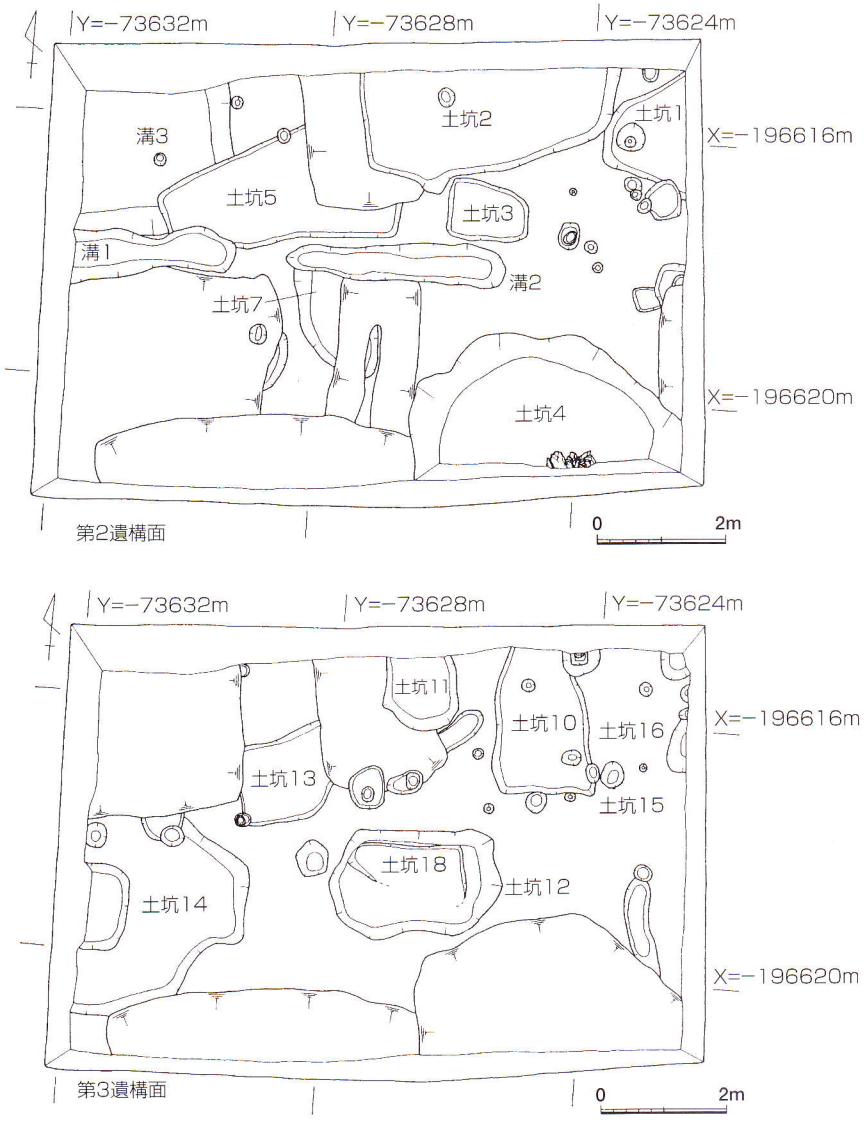
第１遺構面は第２層上面において確認したものであり、遺構面の標高は約3.1mを測る。第１遺構面については調査期間の都合上、面的な調査は行えておらず、壁面における土層の観察から部分的に近世以降と考えられる溝状遺構を確認した。

第２遺構面は第３層上面において確認したものであり、遺構面の標高は約2.9ｍを測る。遺構は鎌倉時代の溝１条（溝３）、土坑２基（土坑１・７）、井戸１基（土坑４）、室町時代の土坑３基（土坑２・３・５）の他、溝２条（溝１・２）、ピット17基を検出した。溝１・２は幅50～80㎝を測り、溝３と直交する方向性をもつもので、遺構の方向性が同一であることから同時期の遺構と思われ、土坑５との切り合い関係から室町時代以降に属する時期が考えられる。ピットは時期の明確なものは少ないが、覆土の特徴から大半が鎌倉時代のものと考えられる。

溝３は、調査区の北西部で検出したもので、遺構の規模は東西2.3m以上、南北2.5m以上、検出面からの深さは46㎝を測る。検出範囲では土坑状の形状であるが、北隣の調査地で検出された堀状遺構の延長部と考えられることから、溝と判断した。遺構の東壁は垂直ぎみに掘削されているが、南側は緩やかに立ち上がる。覆土は４単位に分けられ、出土遺物は、覆土内から土師器の椀・皿・釜、瓦器椀が少量出土した。

土坑４は、調査区の南東部で検出したもので、検出面から80㎝下面で結晶片岩の割石を小口積みした石組を検出したことから、井戸であることが明らかになったものである。

第３遺構面は、第４層上面において検出したものである。遺構面の標高は約2.8ｍを測り、弥生時代中期の土坑４基（土坑10・14・15・18）、古墳時代の土坑１基（土坑13）や中世の土坑３基（土坑11・12・16）、ピット21基などを検出した。弥生時代の土坑（土坑14・15・18）からは完形の土器が、古墳時代の土坑（土坑13）からは滑石製紡錘車がそれぞれ出土した。



第２・３遺構面 遺構全体平面図

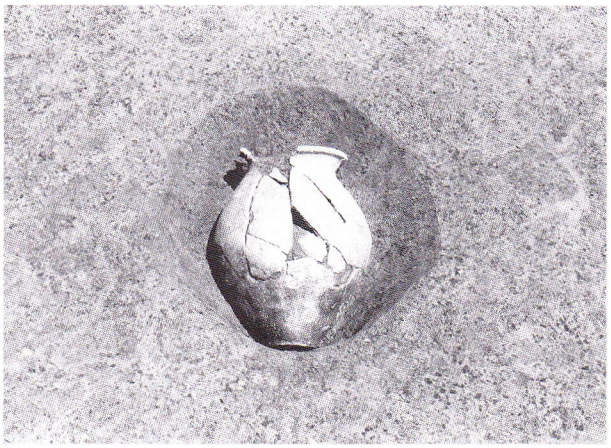
土坑14は、調査区の南西部で検出した不定形な土坑である。遺構の規模は東西2.5ｍ以上、南北3.2ｍ以上、検出面からの深さ30㎝を測る。出土遺物は弥生時代中期の広口壺が口縁部を南側に向け、上部の圧力に潰されているが完形の状態で出土した。この土器の体部中位には1箇所の穿孔が認められる。出土遺物の年代から弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺構と考えられる。

土坑14（南東から）

土坑18は、調査区の中央部で検出した中世の土坑（土坑12）の下面で検出した遺構である。南側は土坑12の削平により遺存していないが、遺構の規模は東西1.9ｍ以上、南北0.6ｍ以上、検出面からの深さは遺存状況の良好なところで40㎝を測る。出土遺物は弥生土器の壺・甕、サヌカイト製のスクレイパーなどが少量出土したが、遺構中央部において口縁部を西側に向けた弥生時代中期の直口壺が完形の状態で出土した。この土器の体部上面には、2箇所の穿孔が認められた。これら出土遺物の年代観から、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

土坑18・12（南から）

土坑15は、調査区の東部で検出した土器棺と考えられる遺構である。ホリカタは土器が据えられる程度の規模に掘削されており、東西35㎝、南北39㎝、検出面からの深さ20㎝を測る。棺身の可能性がある弥生土器広口壺は口縁部を北に向けて、口縁部側を高く、やや斜位に据えられている。土器の底部はホリカタにほぼ接しており、口縁部側に若干の間隔が認められるが、閉塞の痕跡は確認できなかった。広口壺の年代から弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。


土坑15（南から）

土坑13は、調査区の中央部やや北西寄りで検出した遺構である。遺構の規模は東西1.4ｍ以上、南北1.3ｍ、検出面からの深さは15㎝を測る。出土遺物は土師器片が少量出土したが、覆土上層からほぼ完形の滑石製紡錘車が1点出土した。

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代から江戸時代にいたる各時期のものがあり、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、中世須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、常滑焼、瀬戸・

美濃系陶器、輸入陶磁器、肥前系陶磁器、瓦、石器、石製品、金属製品、木製品、自然遺物などが出土した。出土遺物の大半は、鎌倉時代を中心とする中世の遺物によって占められるが、その中でも弥生時代の遺物では土坑14・15・18からは体部に穿孔を施した完形の土器が出土し、また土坑13からは古墳時代のものと考えられる滑石製の紡錘車など、特筆される遺物の出土があった。

まとめ

今回の調査地点は既往の調査の中で最も西側の地点にあたり、財団法人和歌山県文化財センターが実施した北側隣接地の調査成果と合わせ、遺跡西部の様相を明らかにする成果が得られた。

まず弥生時代の遺構では土坑3基、土器棺墓1基を検出した。これらの遺構は、出土した土器の特徴からいずれも中期中葉から後葉にかけての時期のものである。北側隣接地の調査地で検出された弥生時代の遺構は溝3条、土坑1基があり、時期的には本調査のものと同時期の遺構群である。このことから、本調査地周辺における土地利用は弥生時代中期中葉以降に本格化するものと考えられる。秋月遺跡では弥生時代中期以降の遺構・遺物の出土はほとんどないことから、本調査地を含む遺跡西部は太田・黒田遺跡との関連で理解するのが妥当である。

また本調査では、土器棺墓及び遺構廃絶期に意識的に埋納されたと考えられる土坑14・18出土の穿孔土器の存在や、北側隣接地溝146からも完形に近い状態の壺が直立した状態で出土しているなど、その性格は居住域とは異なる墓域的な性格をもつ地域ではないかと考えられる。この点は太田・黒田遺跡における中期の集落拡大に伴い、墓域が本調査地周辺を含む縁辺部にまで及び、中期段階の集落範囲の南限が本調査地周辺まで拡大していることを示す成果と言える。

中世では比較的多くの遺構・遺物を検出し、ピット群の大半はこの時期の遺構であると考えられる。中世の遺構の内、まず第3遺構面検出の遺構（土坑12）が時期的に12世紀後半から13世紀代にかけての遺構と判断でき、第2遺構面検出のものは13世紀後半から14世紀代にかけての遺構と考えられる溝3、土坑3・4と、その埋没後に掘削され、15世紀前半代の遺構と考えられる土坑2・5の2時期に大別することができる。北側の隣接地との対応関係では溝3、土坑3・4が堀状遺構23・土坑24に、土坑2・5が溝9にそれぞれ対応する時期の遺構と判断できる。

この中で特に注目できる成果は、調査区北西部で検出した溝3である。溝3は北側隣接地の調査との位置関係から土坑24と同一遺構であると考えられ、溝3は南北方向に9.6m、東西2.3m以上の遺構であることが判明した。また、北側隣接地土坑24は堀状遺構23と相互に関連した遺構であると考えられていたが、今回の調査で溝3と土坑24が同一の遺構であることが明らかになったことからその関連は確定的となり、溝3と北側隣接地土坑24も堀状の性格を有する遺構と考えられる。このことから、本調査地周辺には、堀状遺構に囲まれた居住空間の存在を想定することができ、本調査地で検出した井戸やピット群などはそれに関わる遺構と考えられる。

以上のように、今回の調査では弥生時代から近世にかけての遺構・遺物を検出し、各時代の様相を把握することができた。特に弥生時代と中世において良好な資料が得られ、秋月遺跡西部の様相を検討する上で貴重な成果になるといえよう。（川口修実）

【参考文献】
『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成14年度－』和歌山市教育委員会　2004年

2．史跡和歌山城（しせきわかやまじょう）第27次調査

調 査 地　和歌山市一番丁3番地内

調査面積　200 ㎡

位置と環境

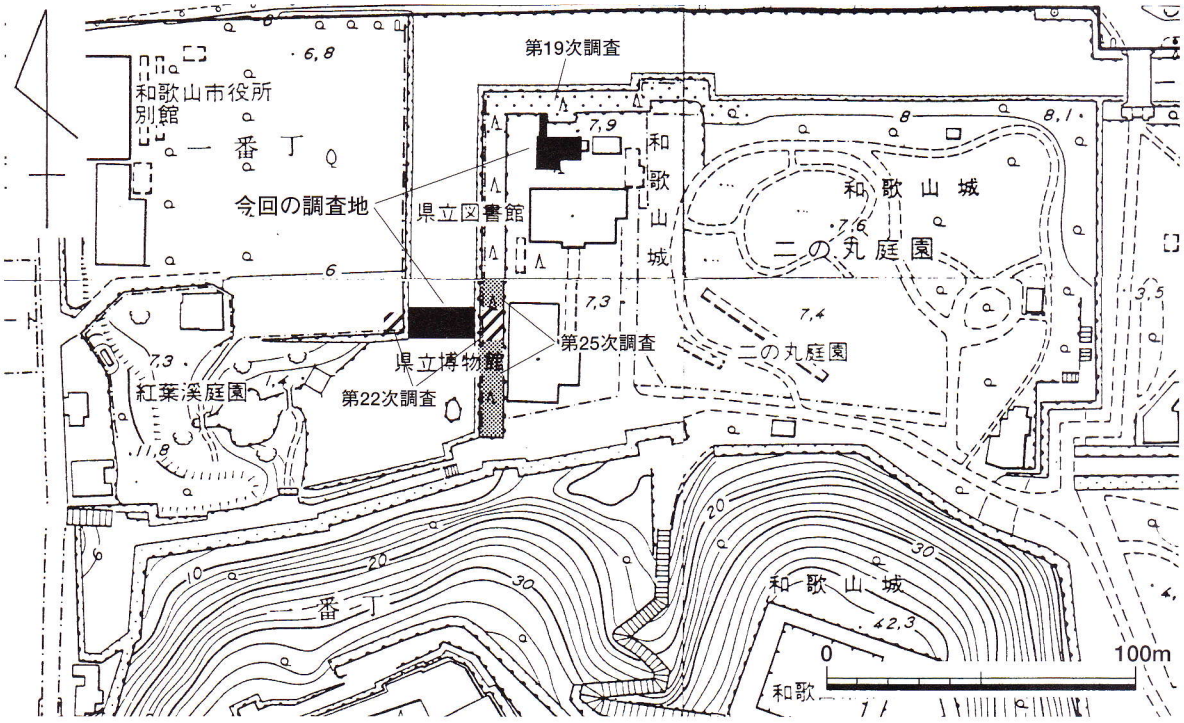
史跡和歌山城は、紀ノ川の河口平野に広がる吹上砂丘北端部、標高49 mの岡山に築かれた平山城である。天正13（1585）年4月、太田城を攻め落とし紀州を平定した羽柴秀吉が、雑賀荘岡山の地に新たな城を築かせたことから始まる和歌山城は、慶長5（1600）年に浅野幸長が城主となり、また元和5（1619）年に徳川頼宣が55万5千石で入国して以来、改修を繰り返し、ほぼ現在の姿になったものと考えられている。

今回の調査は史跡整備に伴い、二の丸西側堀内部に東西8列、南北3列の橋脚基礎が残る御橋廊下について、その前身遺構の存在を確認することが主たる目的であり、合わせて二の丸西面石垣及び、西の丸東面石垣の基底部構造を明らかにするために実施したものである。また、二の丸北西隅部の調査については、御橋廊下が存在した時期の生活面の標高等を確認する目的で実施した。

当財団による御橋廊下に関する調査は、平成11年、堀の浚渫工事に伴う第22次調査において、御橋廊下橋脚基礎の確認と周辺石垣の構造、さらに二の丸・西の丸側石垣上部の調査を行っている。また平成13年に行った第25次調査は、二の丸西面石垣上部における御橋廊下取り付き部分の調査であり、御橋廊下に関わるとみられる礎石を少なくとも3時期にわたり検出している。

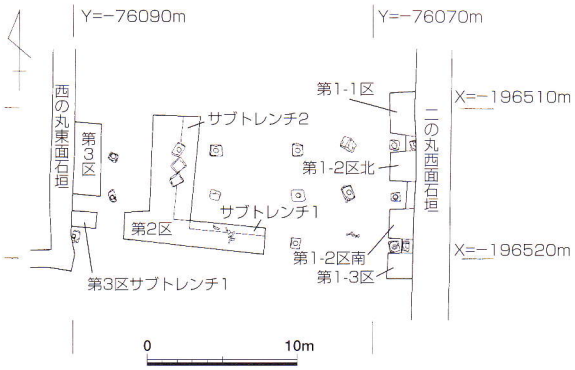
調査内容

二の丸西側堀内部の調査区は、原位置を保つとみられる御橋廊下橋脚基礎を除く範囲として、二の丸石垣際に第1-1～3区、堀内部に第2区、また西の丸石垣際に第3区を設定した。このうち第2区では、崩壊した御橋廊下橋脚基礎の構造を把握する目的でサブトレンチ1・2を設定し、第

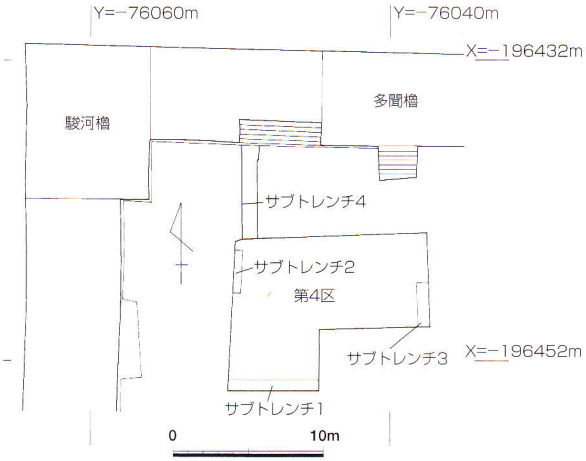


調査位置図

３区では石垣基底石を確認する目的でサブトレンチ１を設けた。第４区は二の丸北西隅部においてＬ字形の調査区を設定したもので、南壁際にサブトレンチ１、また西壁際にサブトレンチ２、東壁際にサブトレンチ３をそれぞれ設定し下層調査を行った。さらに、第19次調査で行った深掘調査との整合性と、石垣１の裏込状況を確認するため調査区北西隅にサブトレンチ４を設定し掘削を行った。



第１～３区　調査地区割図



第４区　調査地区割図

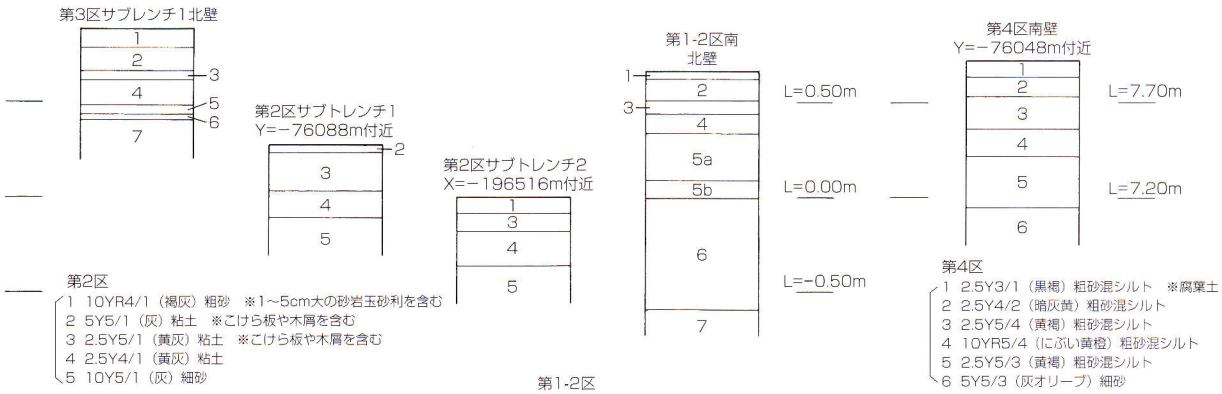
［堀内部の調査］

まず第１区では、第１層上面が最終段階の御橋廊下の橋脚基礎が据え置かれている遺構面である。また第２層は、銅板や鉄釘・鉄鎹の他に焼瓦などを含む焼土層である。第３層は、こけら板や漆器椀・箸など木製遺物を多く含む層であり、この上面が現御橋廊下の前身建物に関わるピット１～３を検出した遺構検出面である。第３層以下については、第６層が二の丸西面石垣の構築に伴う捨て石層とみられるもので、また第７層は自然堆積層の灰色の砂（ベース層）であり、この上面が二の丸西面石垣の構築面である。

第２区では、橋脚基礎の崩落土を第１層とし、そのほか堀内部にはこけら板や木屑を多く含む灰色及び黄灰色の粘土（第２～４層）が堆積している。また堀底には、砂層（第５層）がみられた。

第３区では、第１層の上面が最終段階の御橋廊下橋脚基礎が設置されている遺構面である。また第１層以下は、灰色の粗砂混シルト（第２層）や結晶片岩の板石を含む灰オリーブの粗砂（第３層）、またこけら板、桟瓦、結晶片岩を含む第４・５層が堆積している。さらに第６層は西の丸東面石垣の捨て石層と考えられるものであり、堀底とみられる第７層は第１・２区と同様に砂層である。

遺構については、御橋廊下の前身建物と考えられる遺構が検出された第１区について記述する。



第2区
1　10YR4/1（褐灰）粗砂　※1～5cm大の砂岩玉砂利を含む
2　5Y5/1（灰）粘土　※こけら板や木屑を含む
3　2.5Y5/1（黄灰）粘土　※こけら板や木屑を含む
4　2.5Y4/1（黄灰）粘土
5　10Y5/1（灰）細砂

第3区
1　5Y4/2（灰オリーブ）シルト
2　5Y4/1（灰）粗砂混シルト　※松葉を多く含む
3　7.5Y4/2（灰オリーブ）粗砂　※20～40cm大の結晶片岩を含む
4　5Y4/2（灰オリーブ）シルト混粘土
5　2.5Y4/2（暗灰黄）粘土　※こけら板を多く含む
6　捨て石　※20～40cm大の結晶片岩の板石
7　10Y5/1（灰）粗砂

第1-2区
1　7.5GY6/1（緑灰）粘土
2　2.5Y3/2（黒褐）シルト　※5Y4/6（赤褐）の焼土を含む
3　2.5Y3/1（黒褐）シルト　※下位にこけら板や木屑を多量に含む
4　7.5Y5/1（灰）粗砂　※20～40cm大の結晶片岩を含む
5a　10Y5/2（オリーブ灰）粗砂
5b　10Y5/1（灰）粗砂
6　捨て石　※人頭大から径40～50cm大の砂岩河原石
7　10Y5/1（灰）細砂

第4区
1　2.5Y3/1（黒褐）粗砂混シルト　※腐葉土
2　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂混シルト
3　2.5Y5/4（黄褐）粗砂混シルト
4　10YR5/4（にぶい黄橙）粗砂混シルト
5　2.5Y5/3（黄褐）粗砂混シルト
6　5Y5/3（灰オリーブ）細砂

調査地土層柱状模式図

まず二の丸西面石垣について、基底石は石垣法面から約50㎝ほど前方に迫り出すように設置されている。そのうち第1-3区では、基底石の迫り出しを押さえるように直径約12㎝の木杭が打ち込まれている状態を確認した。また第1-2区の北側には南北方向に横木がみられた。

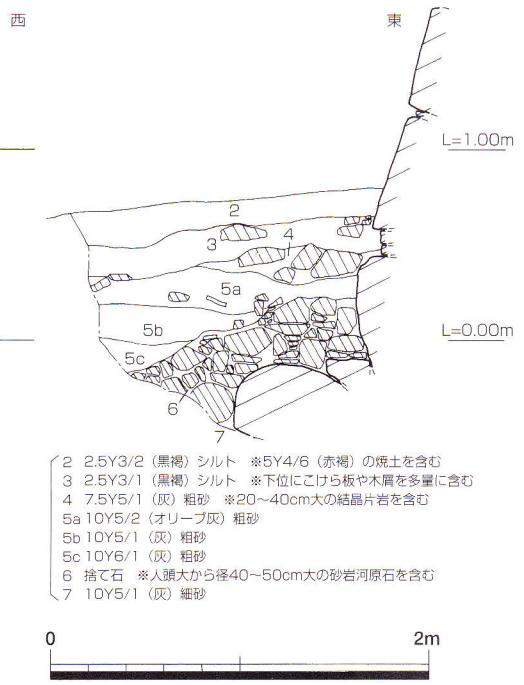
次に二の丸西面石垣際において、ピット1～3を検出した。そのうちP-2・3は最終段階の御橋廊下礎石の真下において、またピット1は橋脚基礎列の延長線上にみられることから、現存する御橋廊下橋脚基礎よりも古い階段の御橋廊下に関わる遺構であると判断した。その間尺は、中心間の距離で平均3.3ｍを測る。覆土は単一で、すべて第2層に酷似する焼土混じりの黒褐色土である。

[二の丸北西隅部の調査]

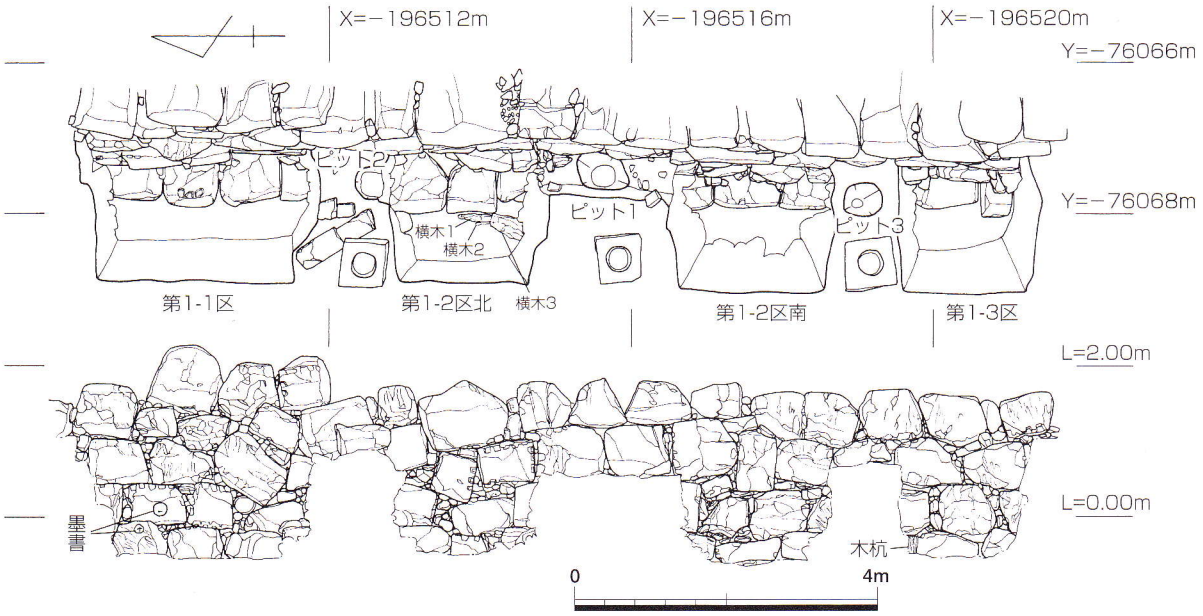
第4区では、調査区全面に堆積する腐葉土や近現代の整地層などを除去した第4層上面において、基礎石組及び礎石建物に伴う根石などを検出した。第4層以下については、サブトレンチ1・2を掘削し調査を行った。その結果、第5層上面では基礎石組・石垣・溝などが、また第6層上面では、撹乱壁面の観察から遺構の掘り込みを確認した。

遺構については、まず調査区の南東隅において根石1～4を検出した。これらは根石2を除き直径1.0～1.2ｍを測るもので、根石3の土層断面観察では、掘削面から深さ約60㎝の土坑の中に明褐色のシルト混粘土と5～15㎝大の砂岩及び結晶片岩礫を充填させるものである。

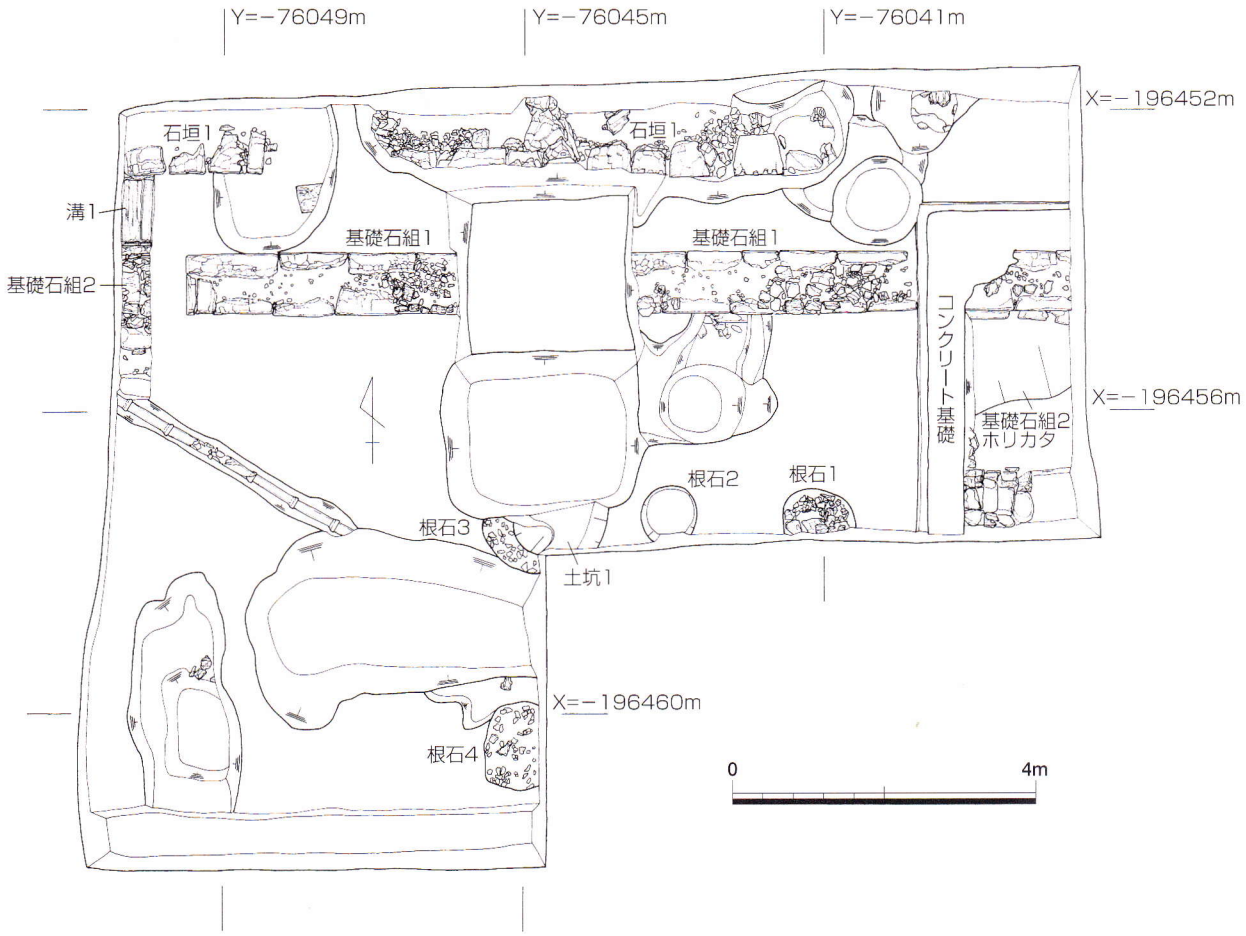
基礎石組1は長さ76㎝以上、厚さ16㎝、幅45㎝の砂岩板石を2枚立て、その間に5～15㎝大の砂岩円礫・結晶片岩・褐色土を充填するもので、幅約80㎝を測る。



第1-2区北　北壁土層断面図



第2区　二の丸西面石垣　遺構全体平面図及び立面図



第4区　二の丸北西隅　遺構全体平面図

基礎石組2・石垣1・溝1は一連の作業によって構築されたもので、サブトレンチ2において検出した。基礎石組2は幅約30㎝、厚さ22㎝の砂岩間石を3段積み上げるもので、高さ約70㎝を測る。このサブトレンチにおいて、基礎石組1は基礎石組2を踏襲してその直上に構築されていることを確認した。また石垣1はほぼ垂直に砂岩を3段積み上げたもので、高さ約90㎝を測る。溝1は、幅約90㎝、深さ約70㎝を測るものである。底面には、長さ80㎝以上、幅24㎝以上の結晶片岩の板石が敷かれていた。

今回の調査において出土した遺物には、土師器・黒色土器・国産陶磁器・土製品・瓦・金属器・木製品などがあり、これらの遺物の総数はコンテナで127箱を数える。

まとめ

第1区で検出されたピット1～3については、その覆土が第2層（焼土）と類似するものであること、また第2層の堆積時期が出土した丸瓦の特徴から18世紀以降となり、この焼土層が文献資料にみる文化10（1813）年の火災によって形成されたものと考えられることから、文化10年の火災を受けた御橋廊下に関わる遺構の可能性がある。また第4区で検出された遺構群の時期は、上位の第3層に一銭硬貨や近世・近代の陶磁器類が含まれることから、江戸時代末のものと考えられる。そこで、寛政9（1797）年～同11（1799）年に作成されたとされる「和歌山御城内惣御絵図」や、寛政9年に作成され文政8（1825）年に改訂された「和歌山二之丸大奥當時御有姿之図」を参照すると、酷似した建物配置が描かれている。よってこれらの遺構群は、絵図と発掘調査による遺構配置がよく符号した資料であると考えられる。（藤藪勝則）

3. 和歌山城跡（わかやまじょうせき） 第９次調査

調 査 地　和歌山市十一番丁１番地

調査面積　160 ㎡

位置と環境

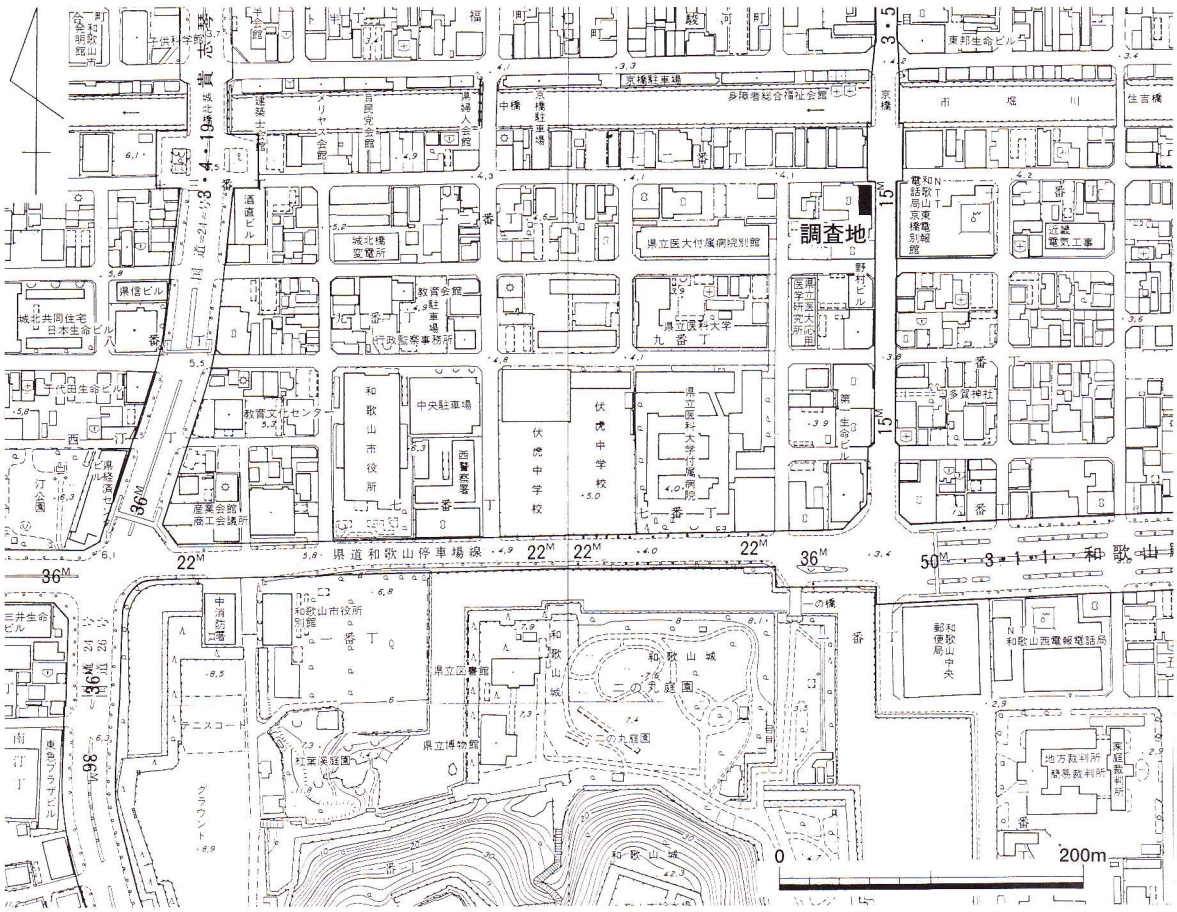
和歌山城跡は、国指定の史跡和歌山城の三の丸に相当する部分をその範囲としている。当調査地は紀州藩家老水野土佐守の屋敷地にあたる地点であり、大正４年12月に竣工され、近代建築の象徴でもあった旧株式会社四十三銀行（のちの三和銀行和歌山支店）が平成３年７月まで存在していた地点にあたる。和歌山城跡の調査は今次で９度を数えるが、水野家屋敷地に相当する調査は第８次調査に次いで２度目となる。

今回の調査対象地は、史跡和歌山城一の橋大手門から大手道を200ｍ程北進した右手にあたり、京橋の南詰めに位置する。

調査内容

調査は、工事計画範囲内の建物基礎部分にあたる地点において、南北20ｍ、東西８ｍの調査区を設定した。当調査地は、銀行建物が平成３年７月に解体されて以降、アスファルト敷きの駐車場として使用されていた。この地表面の標高は4.2ｍ前後で西から東に緩やかな傾斜をもつ。

まず地表面のアスファルトは６㎝の厚みをもち、アスファルト下にはこの面を整地するための砕石が30～45㎝の厚さをもって入れられている。この砕石下には、近代以降の堆積であるにぶい黄

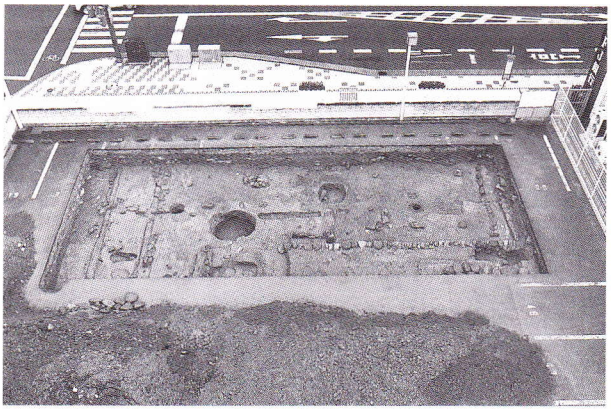


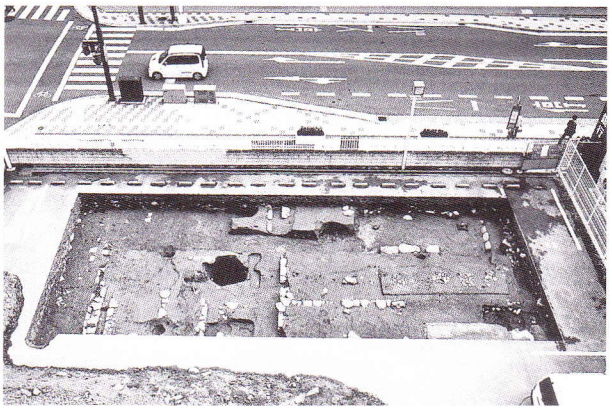
調査位置図

褐色のシルト混粗砂（第１層）が８cm程度の厚さで堆積し、銀行解体時に含まれたとみられる煉瓦片等が含まれていた。第２層は、褐黄灰色系のシルト混粗砂で、10～15cmの厚さで堆積し、瀬戸・美濃系の磁器などから19世紀中頃の堆積と考えられる。第２層下には江戸時代の整地土と考えられた第３層が２単位確認できた。ともに20～30cmの厚みをもつ黄褐色系の土層で、上位の第3a層は19世紀前半頃、下位の第3b層が18世紀代と判断できた。第４層は、厚みが２～10cmの黒褐色粗砂混粘土で炭を多量に含む土層である。この第４層には、肥前系の陶磁器や土師器皿などが含まれ、17世紀前半頃の堆積と考えられる。さらに、下層の第５層は、10～20cmの粗砂層である。これらの層位の中で、遺構が検出できたのは、第２・3a・3b・５層上面の４面であり、この各遺構面において礎石建物や石組溝などの遺構を検出した。

第５層以下の状況は、当地周辺を大規模に整地したとみられる40～60cmの厚みをもつ第６層があり、さらに室町時代の遺物を含む堆積を３単位（第７～９層）確認し、その下の黄褐色細砂混粘土である第10層まで部分的に調査を行った。この第10層では今回の調査では遺物が出土していない。

第３・４遺構面全景（西から）


第２遺構面全景（西から）

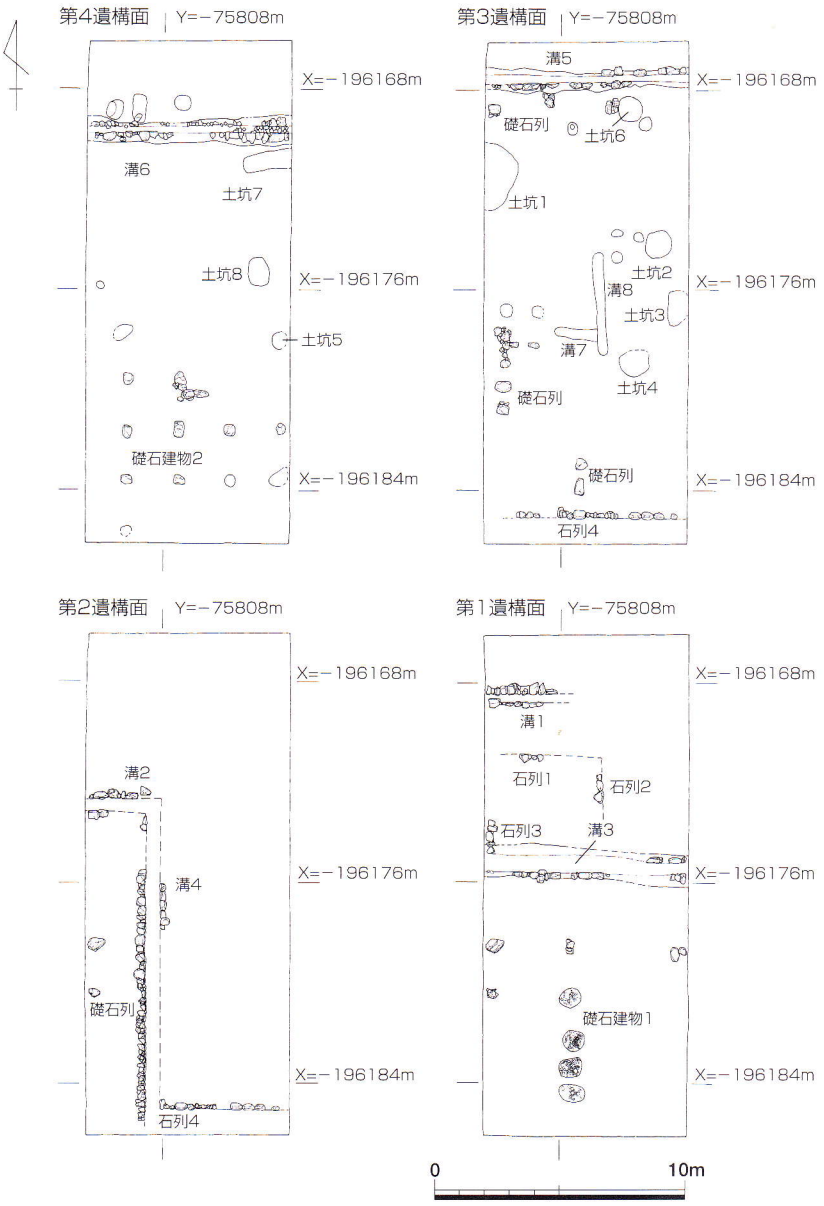

第１遺構面全景（西から）

第４遺構面は、第５層上面（標高3.1m）において検出したものであり、礎石建物１棟（礎石建物２）、石組溝１条（溝６）、土坑３基（土坑５・７・８）やピットなどを検出した。礎石建物２は調査区南半部において検出した真北に主軸をとる礎石建物である。東西・南北とも３間以上の規模をもち、間尺は両方向とも約2.0m（京間の１間）である。溝６は調査区北端部で検出した東西方向の石組溝である。この溝の構築方法は、幅1.3mのホリカタを掘削した後、両側壁に結晶片岩の割石を平積みして固定し、底面を固めた上に10m程度の結晶片岩の割石を敷き詰めている。

第３遺構面は、第3b層上面（標高3.2～3.3m）において検出したものであり、礎石建物に伴うとみられる礎石列２条、石列１条（石列４）、石組溝１条（溝５）、溝状遺構２条（溝７・８）、土坑５基（土坑１～４・６）やピットなどを検出した。礎石列は、ほぼ真北の方向性で南北方向に並ぶ。間尺は約1.0mと狭いが、京間の半間の距離となっている。石列４は調査区南端部で検出した南側に面をもつもので、50cm大の砂岩河原石を立て並べ

た部分と20～30㎝大の砂岩及び結晶片岩を2段分平積みした部分がある。溝5は調査区北端部で検出した東西方向の石組溝である。

第2遺構面は、第3a層上面（標高3.5～3.6ｍ）において検出したもので、一連の石組溝2条（溝2・4）とその西側に礎石列1条を検出した。溝2・4は、調査区中央部やや北寄りの西壁面下を起点として2.2ｍ東進し、直角に折れて南壁面下まで南進する一連の石組溝である。溝の南端部では、前段階の石列4を石組溝として利用し、調査区南東隅まで続いていたものと考えられる。礎石列は真北に軸をもち溝4に並行してその西側に構築されたもので、ともに扁平な結晶片岩を使用している。

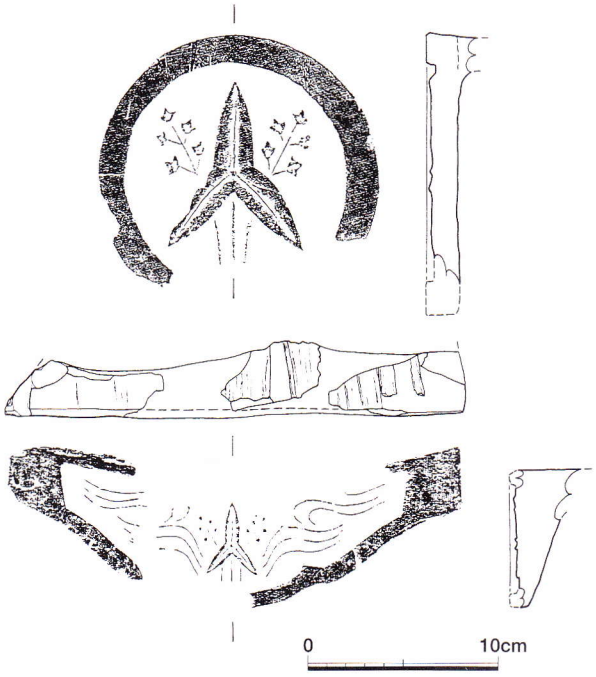


遺構変遷図

第1遺構面は、第2層上面（標高3.7ｍ）において検出したもので、礎石建物1棟（礎石建物1）や石列3条（石列1～3）及び石組溝2条（溝1・3）などを検出した。また、銀行建物に関係するとみられる撹乱坑を多数検出した。この撹乱内には礎石建物に使用されていたとみられる礎石が多数含まれていた。礎石建物1は調査区南半部において検出した東西3間以上、南北3間以上のもので、主軸はほぼ真北に軸をとる。礎石間の間尺は、両方向とも約2.0ｍ（京間の1間）を基準としている。石列1・2は建物を区画する縁石とみられるもので、石列1は北側に、石列2は東側にそれぞれ面をもつ。溝1・3はともに真北に直交する東西方向の石組溝である。使用石材の割合からみれば、溝1は結晶片岩が圧倒的に多く、溝3は砂岩の割合が高い。

今回の調査では、遺物包含層や遺構覆土から出土した江戸時代の遺物のほか、古墳時代から鎌倉時代にかけての土器が少量出土した。遺物量は、遺物収納コンテナ66箱分である。遺物の内容は、古墳時代の土師器と須恵器のほか、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の瓦器などがある。室町時代の土器では、土師器皿が一定量出土したほか、瀬戸・美濃系灰釉皿、備前焼の擂鉢・大甕などがある。また江戸時代の土器・陶磁器類は全体量の大半を占めている。土器以外では、屋敷の屋根及び塀に

葺かれていたとみられる膨大な量の瓦がある。瓦の大半は丸・平瓦で、次いで桟瓦が目立つ。軒瓦の瓦当文様では、軒丸瓦に三巴文と沢瀉紋が、軒平瓦に唐草文が、滴水瓦に唐草文と沢瀉紋がある。沢瀉紋は紀州藩家老水野家の家紋として用いられていたもので、特に重要視される。道具瓦としては鬼瓦・鯱・面戸瓦・板塀瓦などのほか、塼が出土している。土製品では、焼塩壺が比較的多く出土したほか、フイゴの羽口や提灯・馬などの泥面子、猪や狛犬などの土人形がある。また石製品では碁石や硯・石盤があり、石造物としては花崗岩製五輪塔の火輪が1点出土した。金属製品では、銅製品として銭貨（元豊通寶・寛永通寶）やキセル・箸が、鉄製品として針・釘・鏃などがある。



遺物実測図

まとめ

今回の調査では、これまで不明であった水野家屋敷跡に関係する4面の遺構面を確認し、それぞれの遺構面において建物配置等良好な遺構を検出してその一端を明らかにできたことにある。各遺構面の時期は、第4遺構面が17世紀の前葉～中葉に、第3遺構面が17世紀の中葉以降19世紀前葉に、第2遺構面が19世紀前葉～中葉に、第1遺構面が19世紀中葉から明治時代にそれぞれ位置づけられる。第4遺構面終焉の理由としては、西側の地盤沈下跡や礎石の熱変及び第4層に含まれた多量の炭などから地震や火災などの災害が要因のひとつに挙げられ、これが地震に起因するものとすれば寛文2（1662）年などの大地震が想定できる。また第3遺構面においても検出面に焼土の堆積を確認しており、前段階同様火災等の影響が考えられる。各遺構面において検出した礎石建物は、すべてほぼ真北の方向性をもち、間尺は京間尺（1間1.97 m）を使用するという面で共通点があり、また石組溝も真北もしくはそれに直交する方向性で配置されている。

遺物からみた成果としては、紀州藩家老屋敷という特別な見地から特殊な遺物が出土すると考えられた。調査の結果、多量の国産陶磁器をはじめ中国製染付などの輸入陶磁器が一定量出土し、当時としては貴重な品を所有していたことを明らかにした。また膨大な量が出土した瓦は、屋敷の屋根や塀に葺かれていたもので、中には水野家の家紋である「沢瀉」を瓦当文様に使用しているものもあり、瓦類の中では鯱瓦の破片が3点出土しており、重厚な屋敷構えを有していたものと推定できる。

最後に、サブトレンチ内の小規模な調査であったが、中世の遺物包含層を確認し、一定量の遺物出土が認められたことは、江戸時代の城下町形成に関する大規模な整地以前の遺構面が下層に存在する可能性を提示したものであり、今後の調査によって明確にしていくひとつの課題であろう。

（井馬好英）

【参考文献】　『和歌山城跡第9次発掘調査概報』　財団法人和歌山市文化体育振興事業団　2003年

4．津秦（つわだ）Ⅱ遺跡発掘調査

調 査 地　和歌山市津秦地内

調査面積　120 ㎡

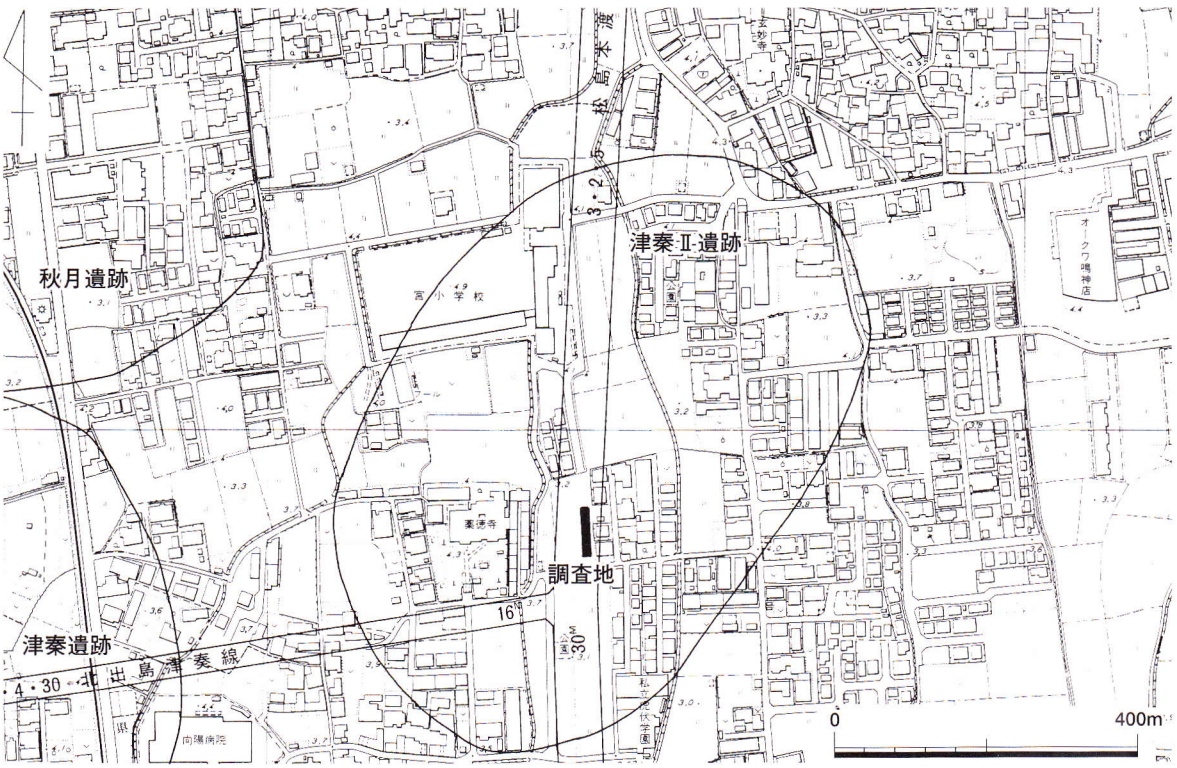
位置と環境

津秦Ⅱ遺跡は、紀ノ川左岸、標高約 3.2 mの沖積平野に立地する遺跡である。本遺跡は古墳時代から奈良時代の遺物散布地として周知されており、遺跡の範囲は東西約 300 m、南北約 400 mに広がるもので、調査対象地は遺跡のほぼ中央部に当たる。

調査内容

調査は東西約 4 m、南北約 30 mの調査区を設定し行った。調査地の基本層序については、近現代の耕作土とそれに伴う床土を第１・２層とした。第３～5a層は室町時代の遺物包含層、第5b層は鎌倉時代の遺物包含層である。北側において確認した第６・７層は無遺物層である。遺構面は第４層、第5a層、第5b層、第６層の各上面において計４面を検出し、それぞれを第１遺構面から第４遺構面とした。

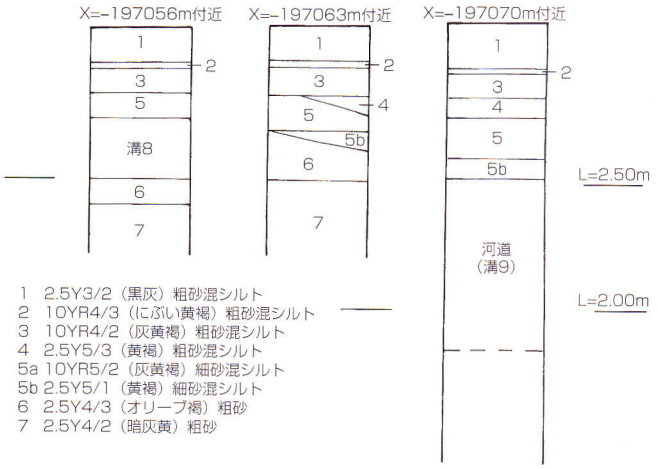
第１遺構面において、溝４条と噴砂を検出した。小溝（溝１～３）は、それぞれ幅約 20 cm、深さ約３cmを測るもので、N-5°-Eの方向性をとり、現在の正方位地割りに近似していることなどから耕作に伴うものと考えられる。溝４は幅 30 ～ 80 cm、深さ約 10 cm、長さ約 4.8 mを測り、N-13°-Eの方向性をもち、他の小溝に比べ東に偏した角度を測るものである。これらは出土遺物から、室町時代後期のものと考えられる。



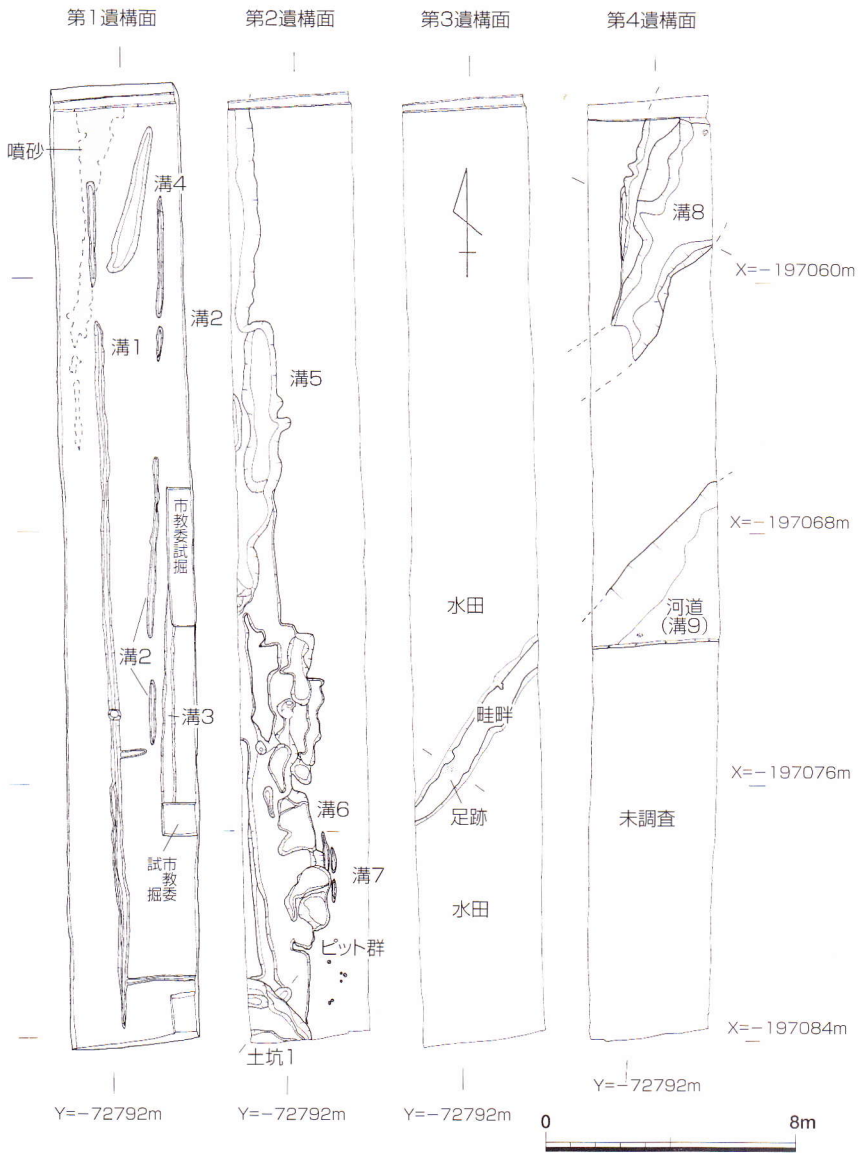
調査位置図

北側において検出した噴砂の砂脈はN-3°-Eの方向性がみられる。包含層などの出土遺物や土層観察などから室町時代後期に起こった地震により形成されたものと考えられ、液状化した第6層が第3層の途中まで吹きあがっている状況を確認した。

第2遺構面は溝状遺構（溝5）、土坑、ピット群、小溝（溝6・7）を検出した。これらは、出土遺物から室町時代のものと考えられる。調査区中央部から西側において検出した溝状遺構（溝5）は、検出幅2.5m以上、南北長30m以上、深さ約30cmを測り、溝状に掘削されたものである。掘削形状などから粘土採掘坑の可能性が考えられる。土坑1は調査区の南側において検出した。検出幅2m以上、南北長2m以上、深さ約70cmである。溝状遺構（溝5）の埋没後に掘削されたものであり、埋土は3層に分層することができる。この遺構についても掘削形状などから溝5同様、粘土採掘坑と考えられる。調査区の南側において検出したピットは5基検出しており、それぞれ径10～15cm、深さ約5cmの範囲の規模を測る。また小溝（溝6・7）は、それぞれ幅約20cm、深さ約2cm、溝6は長さ約1.2m、溝7は長さ約1.7m検出し



調査地土層柱状模式図



遺構平面実測図

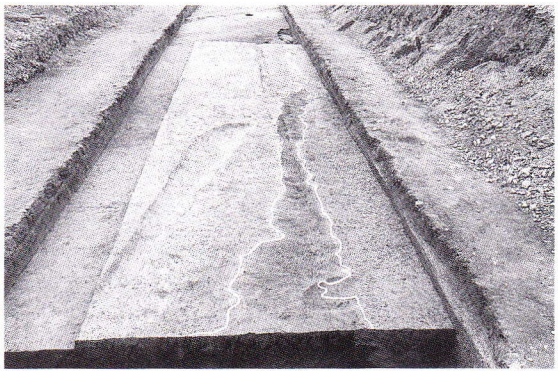
た。これらの小溝はN-3°-Wの方向性をとり、現在の水田にみられる正方位地割りに近似した角度で掘削されていることなどから耕作に伴うものと考えられる。

第3遺構面においては、水田遺構の畦畔及びそれに区画された水田区画を検出した。畦畔は幅約60㎝で調査区内を北東から南西方向に横切り、現在の水田にみられる正方位地割りとは異なりN-25°-Eの方向性をとるものである。また、畦畔上面には動物のものとみられる足跡痕を9単位確認した。耕土とみられる第5b層の出土遺物から、鎌倉時代前期の遺構と考えられる。

第4遺構面では溝（溝8）と河道（溝9）を検出した。河道（溝9）は、遺構の北側肩部を検出した。検出幅4.6m以上、長さ15m以上を測る北東から南西方向の大溝である。調査区南端部で約1.1mの深さまで掘り下げたが、完掘には至らなかった。埋土は8層に分層することができ、土層の堆積状況などから自然河道であると考えられる。時期については、上層の出土遺物から古墳時代前期に洪水で埋没したものと考えられる。溝8は北東から南西方向の溝である。検出幅約3.8m、南北長9m以上、深さ約20㎝の規模を測るものである。底面の標高から北東から南西方向へと流路方向をもっていたものと考えられる。埋土は5層に分層することができ、特に第3層から多量の土器が出土した。出土遺物から古墳時代前期に埋没したと考えられる。土層堆積状況などから河道（溝9）の支流である可能性がある。

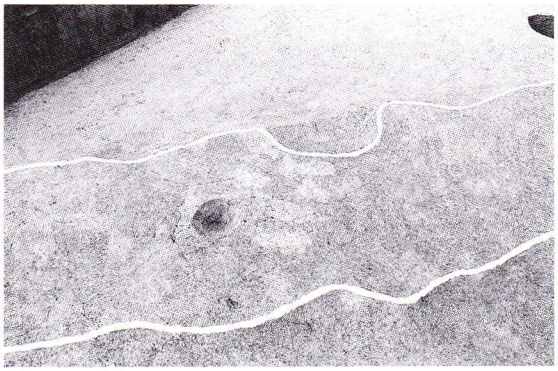
遺物は遺構の埋土及び包含層から、古墳時代から江戸時代にかけてのものが遺物収納箱（コンテナ）に6箱分出土した。

遺物の種類について、土器類では須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、東播系須恵器、中世土師器、焼締陶器（備前焼・常滑焼）、中国製磁器などが出土している。この内、特に古墳時代の河道（溝9）と溝8から一定量の良好な資料を得ることができた。土器類以外の遺物では、瓦、石器、金属製品などがあり、その他自然遺物として獣骨、炭などが出土した。



第1遺構面　噴砂検出状況（北から）

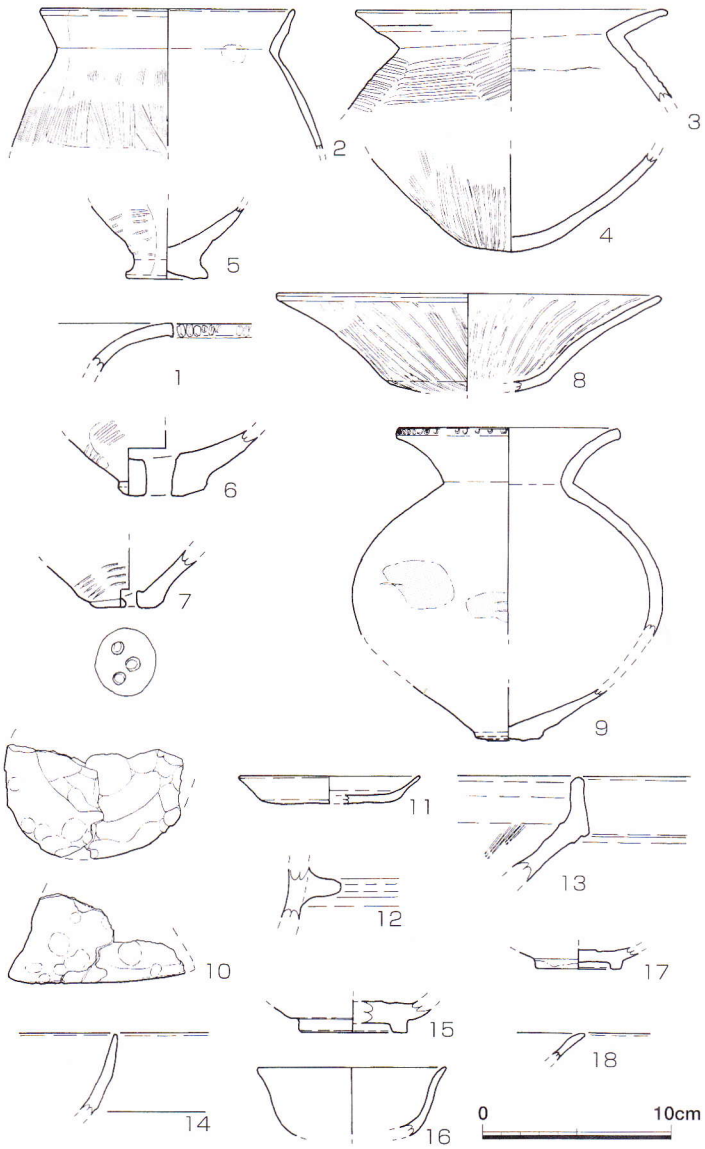
第2遺構面　全景（南から）



第3遺構面　畦畔・足跡痕（北西から）

第4遺構面全景（北から）

1～9は土師器で、1は広口壺、2～5は甕、6・7は甑、8は高杯、9は広口壺である。10は土製品で支脚の基部とみられる。11は瓦器皿、12は瓦質釜、13は備前焼擂鉢、14は瀬戸・美濃系天目茶碗、15～18は中国製磁器である。15は青磁碗、16は白磁碗、17・18は白磁皿で同一個体の可能性がある。



遺物実測図

まとめ

今回の調査において、古墳時代前期と鎌倉時代から室町時代にかけての4時期の遺構面を検出することができた。以下、時期別に遺構変遷を説明する。

第1遺構面は、第2遺構面検出の水田遺構に類似したN-3°-Eの方向性を持つ条里型の水田を検出したことから、水田は継続して室町時代後期にも営まれたものと考えられる。また噴砂から、室町時代後期に大規模な地震があったと推察される。

第2遺構面は室町時代中期頃のもので、溝6・7からみてN-3°-WからN-5°-Eまでの方向性をもつ条里型の水田と考えられる。また土坑1と溝状遺構（溝5）は粘土採掘の痕跡とみられ、特に溝状遺構（溝5）については、N-5°-Wの方向性がみられることから水田区画単位に採掘が行われていたものと考えられる。

次に第3遺構面において検出したN-25°-Eの方向性をもつ畦畔に区画された水田は、周囲の微低地部分が鎌倉時代前期までに水田開発されたものと推定される。

第4遺構面において検出した河道（溝9）は、古墳時代前期には埋没し、その後、周囲は低湿地化したものと考えられる。

以上、本調査の結果、古墳時代の河道や溝、鎌倉時代の水田、室町時代の粘土採掘坑とみられる溝状遺構、噴砂などを確認することができ、津秦Ⅱ遺跡の性格の一端を明らかにすることができた。

（奥村　薫）

5．旧中筋家住宅第４次調査

調 査 地　和歌山市禰宜148番地

調査面積　50 ㎡

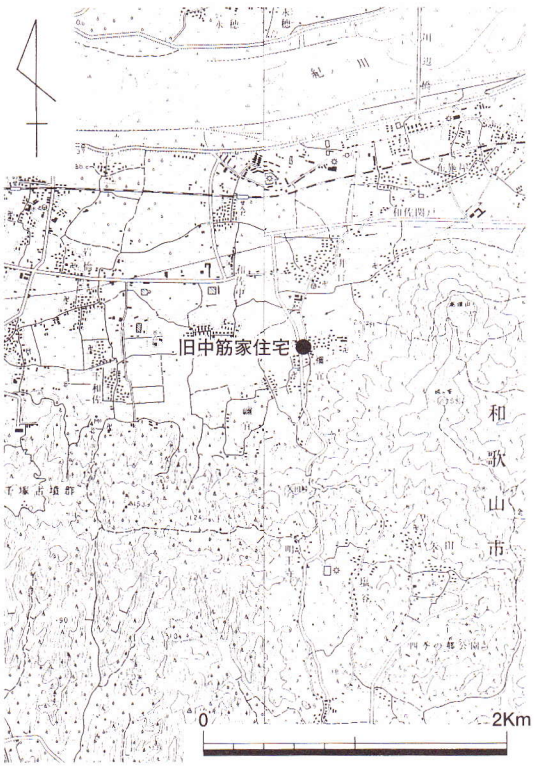
位置と環境

旧中筋家住宅は国の重要文化財に指定されている建造物である。中筋家は江戸時代には和佐組の大庄屋であったとされており、組下の村々の統治に重要な役割を果たした。現在の主屋が建てられた年代は江戸時代末の嘉永５（1852）年前後と考えられており、それは鬼瓦の紀年銘からも窺うことができる。

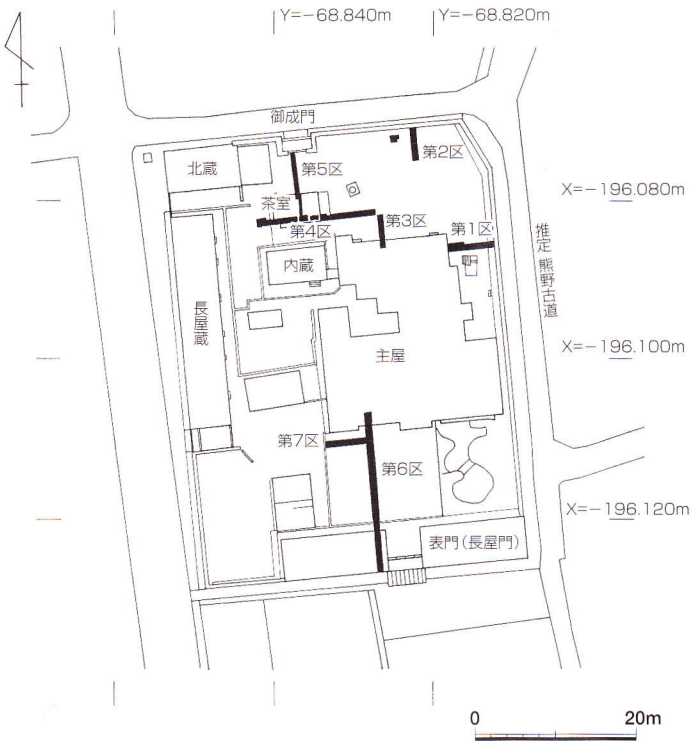
今回の調査は旧中筋家住宅の解体修理に伴うもので、現存建物等の構築状況及び前身建物の遺構や敷地拡張の痕跡等を確認するために実施したものである。特に前身主屋の配置を示す古図の存在や、天保14（1843）年に南へ二間、東へ一間拡張したことを示す文献がみられることから、これら文献史料との対応が注目された。

調査内容

調査区は、主屋を中心とした敷地各所に幅約80㎝のトレンチを７ヶ所設定した。調査区の層序は場所により大きく異なるが、堆積の時期的対応や整地目的等から大きく第１～５層に把握できる。第１層は腐葉土を含む現状の表土である。第２層は現存主屋に伴う整地土、つまり現存主屋の構築時の地表面に相当するものとみられる。第３層は主として黄褐色粘質土に灰色粘土をブロックで含むもので、現存主屋構築に伴う盛土とみられる。40～50㎝と厚く堆積し、広範囲で確認できるこ



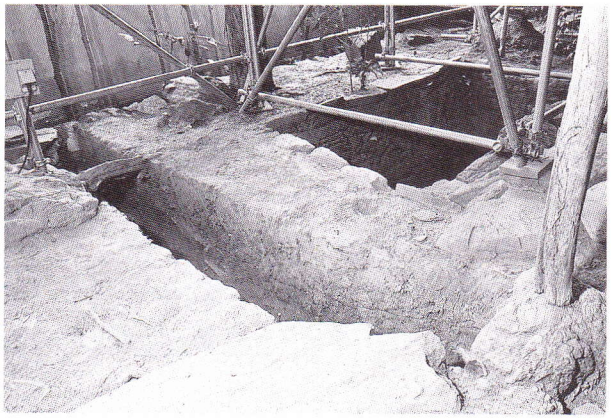
調査位置図



調査区配置図

とから、現主屋を構築する際に大きく敷地のかさ上げが行われたと推定される。第４層は前身建物の時期の地表面に相当する堆積と考えられる。敷地北側を中心にみられるが第３・４区では堆積が薄くなる。遺構はこの第４層上面の段階で検出しており、この面が前身建物の遺構面と考えられる。また第３区では結晶片岩の根石を第５層上面に据え置き、その上に砂岩礎石をおいて第４層で整地を行っている。この状況から第４層は前身主屋に伴う整地土、第５層は前身主屋構築に伴う盛土と考えられる。

遺構は第４層上面の前身主屋関連の礎石を中心に検出している。まず、第１区は主屋北東部から土塀にかけて設定した調査区である。文献資料には敷地を東へ一間拡張したとの記載がみられたことから、この第１区において敷地拡張の痕跡が存在する可能性が考えられたが、前身建物の地表面に相当する第４層は石垣内外共に堆積しており、敷地境界を示すような土層の違いは確認できなかった。遺構としては、第４a層に一部露出する形で結晶片岩の板石を検出した。また東端部石垣は第４層上面に基底石を据えており、盛土（第３層）を施す際に土留めとして構築されたとみられる。なお特筆すべき点として、第４層上面の南壁面において桟瓦（遺物実測図参照）が出土した。これは桟の部分を丸く屈曲させる、いわゆる丸桟瓦と呼称されるもので、現存主屋に葺かれていた瓦と同様のものである。出土層位からみると、前身建物存在時から現主屋構築直前までの時期の資料とみられることから、前身建物にも丸桟瓦が使用されていた可能性が考えられる。



第１区　全景（北西から）

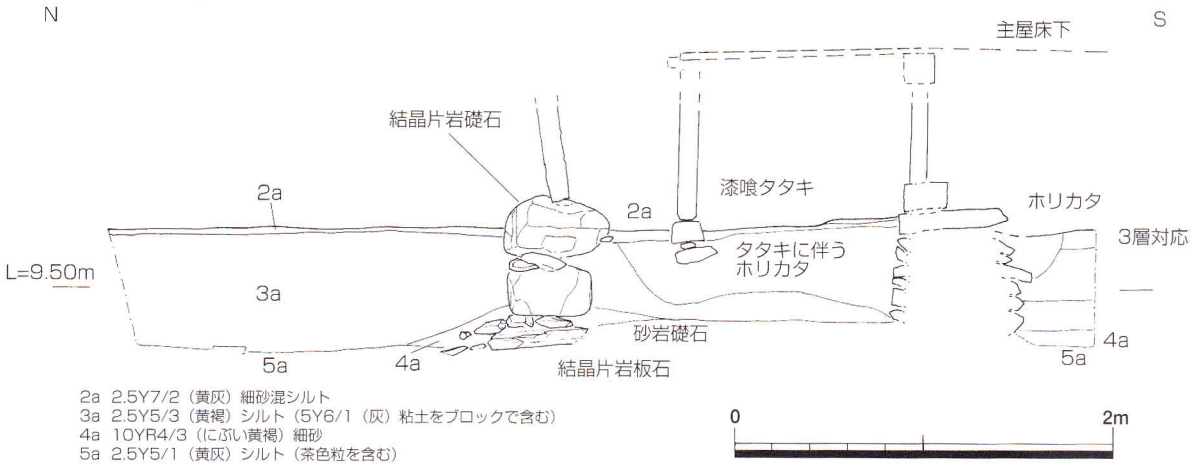
第２区　暗渠排水溝（蓋石撤去前）（南東から）

第３区　前身建物礎石検出状況（東から）

第２区は敷地北東部の土塀を中心に設定した調査区で、絵図に描かれている前段階の御成門の確認を主眼において調査を行った。第４a層上面において結晶片岩石材による暗渠排水溝を検出したが、門に関連するとみられる遺構は確認できなかった。

第３区は主屋北側に設定した調査区で、層序は土層断面図に示したとおりである。この調査区では現存主屋の庇柱礎石の直下から、前身建物に関するものとみられる砂岩礎石と結晶片岩根石を検出した。

第４区は主屋と内蔵の北側の茶室周辺、第５区は茶室から御成門にかけて設定した調査

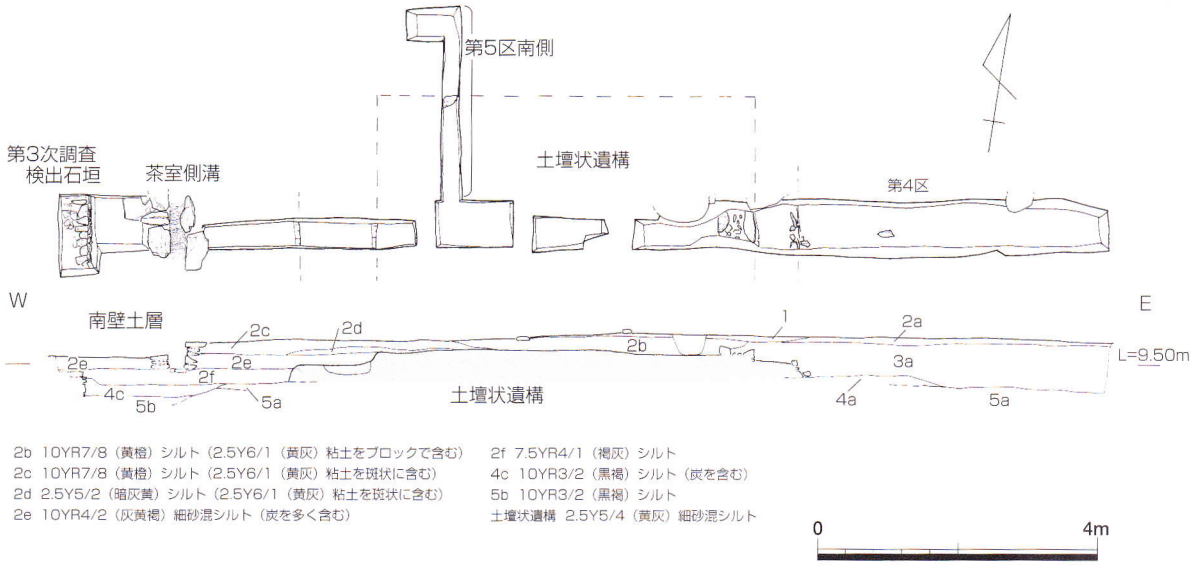


第３区土層断面図

区である。この調査区では第３層掘削後、第4a・5a層上面に盛土をして構築される土壇状遺構を検出した。東西は２段築成で幅0.6～1.0ｍの犬走り状の平坦面をもつ。第４区西端部では、第３次調査検出の石組周辺を拡張して掘削したところ、石組は側溝ではなく現長屋蔵部分の敷地造成のための土留めに相当するものであることが明らかになった。また、第４区西側では第５層堆積の西端を確認、第５区では現御成門礎石が第４層上面に据えられている状況を確認した。

土壇状遺構基礎石組（北から）

第６区は主屋南側から表門にかけての範囲に設定した調査区で、北から大きく主屋内、前庭、表門内の３カ所に分けられる。まず表門内では、土層堆積状況から調査地南端部の用水路石



土壇状遺構平面図及び土層断面図

垣と敷地の造成状況について、盛土を施す段階、石垣構築とそれに伴う裏込石、裏込埋土を施す段階、石垣から北方向へ盛土を施す段階の３段階に大きく分けられた。このうち、第３段階盛土の最上層が第5a層にあたる。第5a層は敷地の広範囲にみられる土層で前身建物構築に伴う盛土と考えられる。次に主屋内では、主屋の土間部分を調査した第２次調査に対応する土層を確認できた。前庭部分では第３層に対応する整地土が比較的安定して堆積しているが、第１～５区にみられた第3a層とは土質等が異なっている。

第６区　表門内土層堆積状況（西から）

第７区は主屋南西部において東西方向に設定した調査区である。第3p層上面で結晶片岩石材を検出、石材検出付近より東側には盛土とみられる第3j層が堆積していることを確認した。この石材の配置は不規則で現位置を保っていないが、盛土に伴う土留め等の役割をもっていた可能性がある。

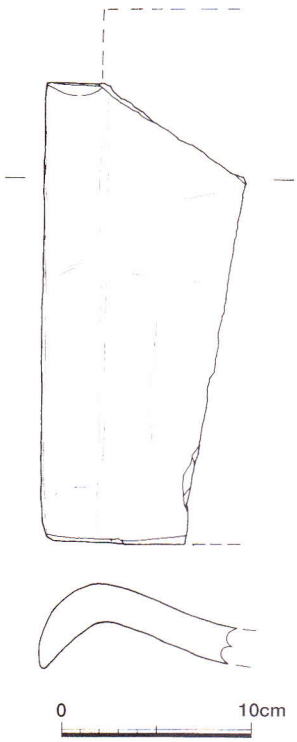
まとめ

前身建物に関する遺構としては、第１区の礎石の根石とみられる結晶片岩板石、第２区の東西方向の暗渠排水溝、第３区の砂岩礎石及び結晶片岩根石、第４・５区の建物の痕跡とみられる土壇状遺構が挙げられる。特に第３区では、現存礎石の直下で前身建物礎石を確認したことから、前身建物の配置を検討する資料が得られたといえる。

前身建物構築のベースになる第５層については広範囲でその堆積を確認しており、第４区では堆積の西端部を検出している。これが古図より推定される前身建物段階の敷地範囲と類似することから、第５層の堆積範囲＝拡張前の敷地範囲を示す可能性がある。また第６区では敷地南端部の石垣構築及び造成状況を確認でき、南端部用水路石垣と第５層との関係を明らかにすることができた。

なお、調査前の段階で天保14（1843）年に南へ２間、東へ一間拡張したことを示す文献の存在が知られており、関連する成果が予想されたが、この記述に合致する拡張の痕跡は今回の調査では確認されなかった。

（髙橋方紀）



桟瓦実測図

6．車駕之古址古墳第6次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本719-1番地

調査面積　100 ㎡

位置と環境

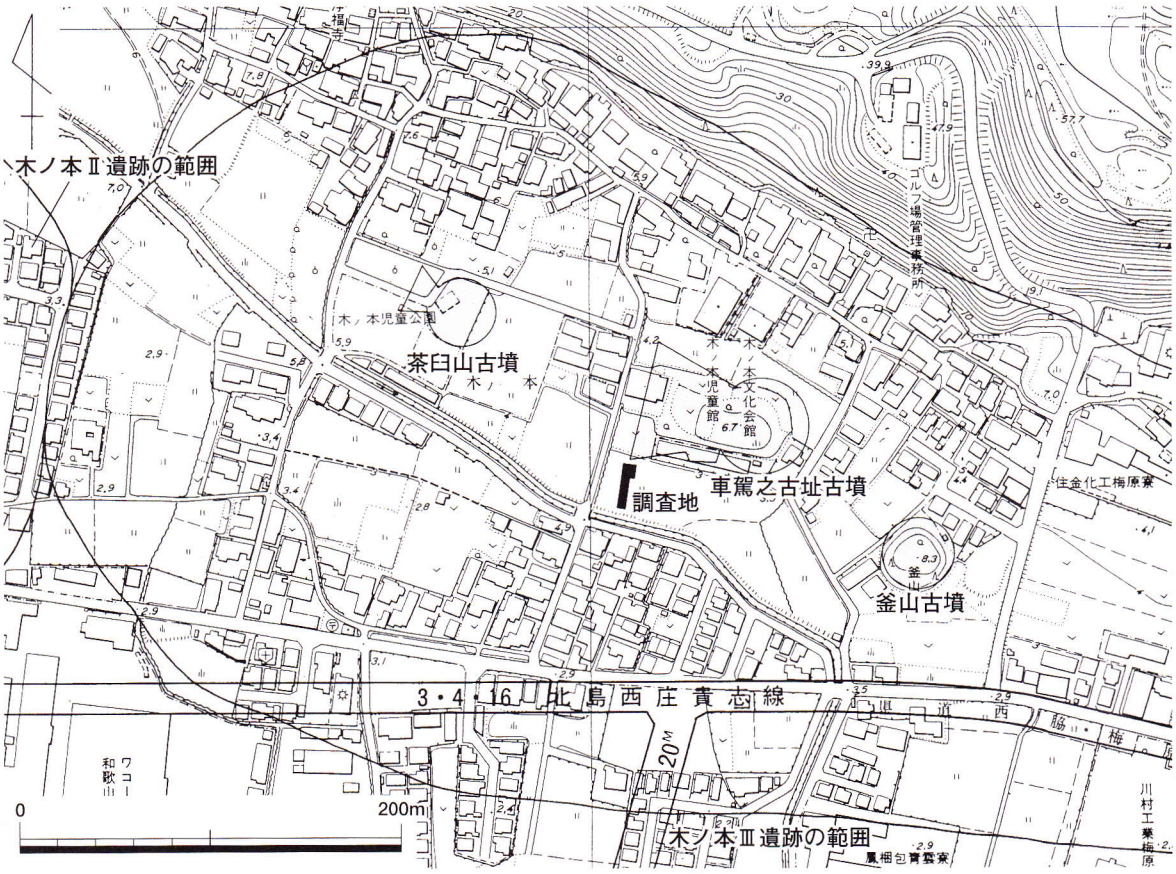
車駕之古址古墳は和泉山脈山麓の沖積段丘上に立地し、外堤を含めた全長は約120 mを測る県内最大規模の前方後円墳として知られている。本古墳は国内唯一の金製勾玉が出土したことで注目され、既往の調査成果から段築、盾形周濠、造り出しを備えた整備な中期古墳であることが明らかになっている。本古墳の西方150 mには茶臼山古墳（後円部径36 mの前方後円墳か）、南東100 mには釜山古墳（直径40 mの円墳）が位置し、車駕之古址古墳を中心として3基の古墳が東西にほぼ等間隔に並び、釜山古墳群（木ノ本古墳群）を形成している。また釜山古墳群は木ノ本Ⅲ遺跡の範囲内に含まれ、遺跡の範囲内では西側に位置する。

今回の調査は従来未調査であった車駕之古址古墳南西部の水田を調査対象地とし、前方部の南西端部の検出を主目的として、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施したものである。

調査内容

調査は従来の古墳復元図をもとに前方部南西端部推定地を中心に南北6 m、東西6 mの調査区を設け、周濠・外堤の状況確認を目的としてその南側に南北16 m、東西4 mの調査区を設定した。

当調査地の基本層序については、現代の水田耕作土（第1層）と床土（第2層）、その下層に近



調査位置図

世後期の水田耕作土（３層）と床土（第４層）、さらにその下層に中世後期後半の水田耕作土（第５層）と床土（第６層）、中世前期の遺物包含層（第７層）が堆積する。第７層には中世土師器や瓦器を中心とする多くの遺物が包含されており、特に下層には一定量の埴輪・葺石が含まれ、古墳を削平し周濠を埋めた整地土の性格が考えられる。第７層の下面には車駕之古址古墳の墳丘及び周濠の堆積土が確認でき、その下面は標高1.90ｍで湧水層である細砂層となる。

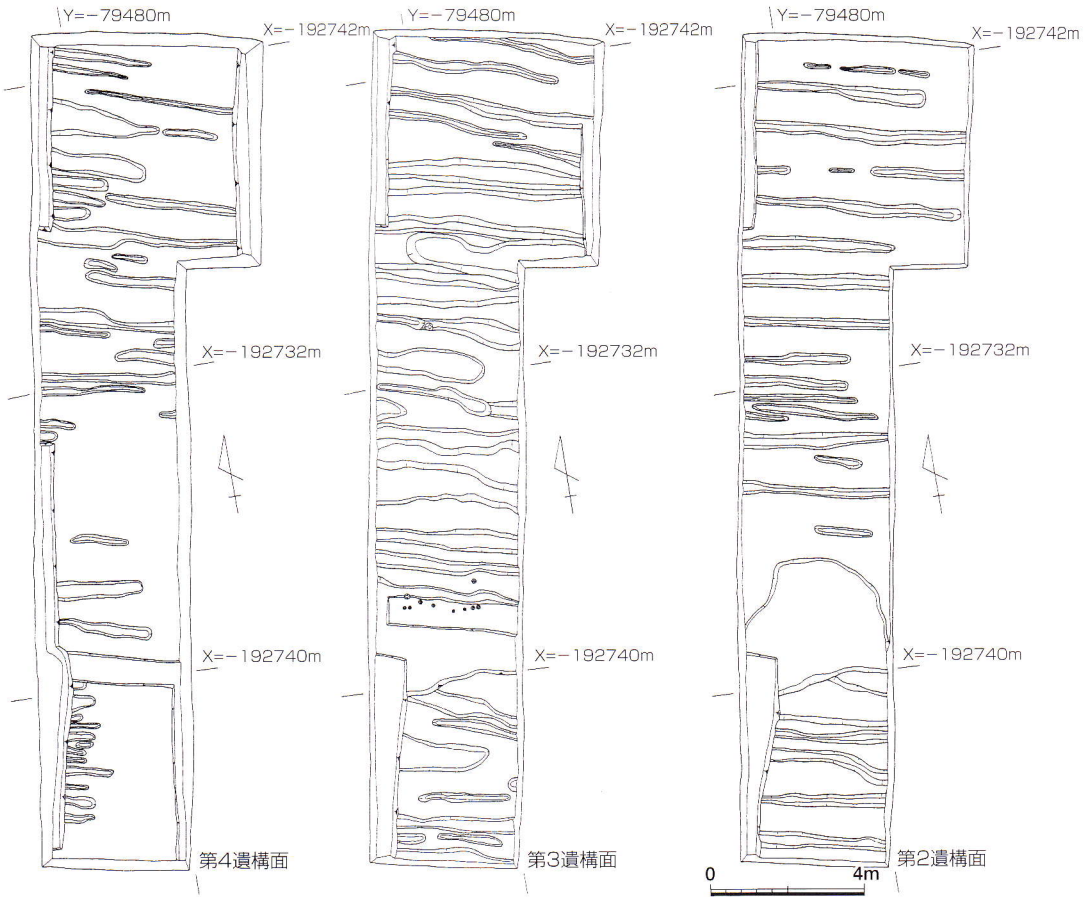
遺構については、古墳時代中期から近世にわたる５面の遺構面を確認した（第１～５遺構面）。

第１遺構面は第３層上面で検出したものであり、遺構面の標高は約2.9ｍを測る。調査区南端において水田区画を１ヶ所検出した。

第２遺構面は第４層上面で検出したものであり、遺構面の標高は約2.7ｍを測る。東西方向の溝を24条、土坑１基を検出した。溝は心々間の間隔は一定ではなく、40㎝～１ｍ間隔のものが多い。遺構の規模は幅が20～40㎝を測り、検出面からの深さはいずれも10㎝未満の浅いもので、覆土は単一である。遺構の方向性はほぼ一定であり、N-80°-Eの方向性をもつ。

第３遺構面は第５層上面で検出したもので、遺構面の標高は約2.6ｍを測る。東西方向の溝を27条、ピット11基を検出した。遺構の規模は20～30㎝を測るものと60㎝を越えるものがあり、深さは10㎝未満の浅いものが多い。覆土はいずれも単一で、遺構の方向性は概ねN-70°-Eである。

第４遺構面は第７層上面で検出したものであり、遺構面の標高は約2.3ｍを測る。東西方向の溝を38条検出した。溝心々間の間隔は一定ではなく、30～50㎝間隔のものが多いが、調査区南側



第２～４遺構面遺構全体平面図

では密集して確認できた。遺構の規模は幅が15～20㎝を測るものと30㎝を越えるものがあるが、遺構の形状は一様ではない。検出面からの深さはいずれも10㎝未満の浅いものであり、覆土は単一である。遺構の方向性も一定ではないが、概ねN-70°-Eの方向性をもつ。

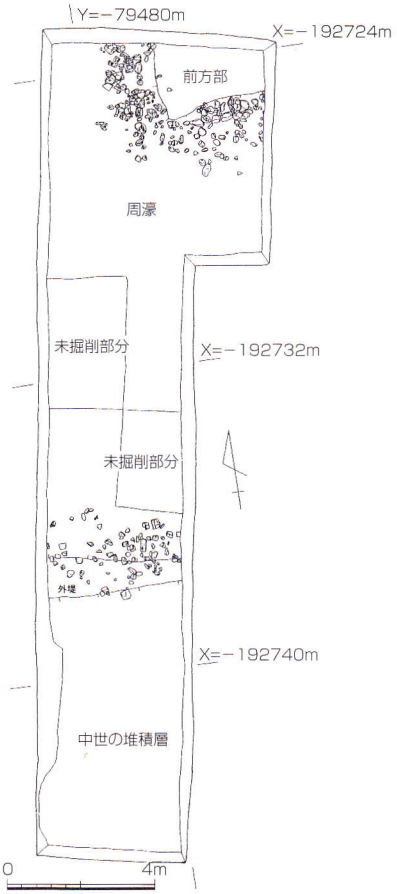
第5遺構面では前方部南西端部・外堤及び周濠を確認したが、湧水による足場不良な箇所については未掘削とした。

まず前方部は中世の削平によって葺石は乱された状況であったが、東西3.4ｍ、南北2.4ｍ分を検出し、従来の古墳復原案とほぼ一致した位置から前方部南西端部を検出した。転石の範囲は南・西側に及び、墳丘を北側から削平し、周濠を埋め立て整地した状況が考えられる。葺石は基底石のみが原位置を保って検出されたが、遺存状態は悪い。葺石基底石設置のレベルは1.9ｍであり、基底石上面のレベルは2.1ｍを測る。また、隅角及び区画列石から想定できる葺石の積み上げ角度は約20°である。

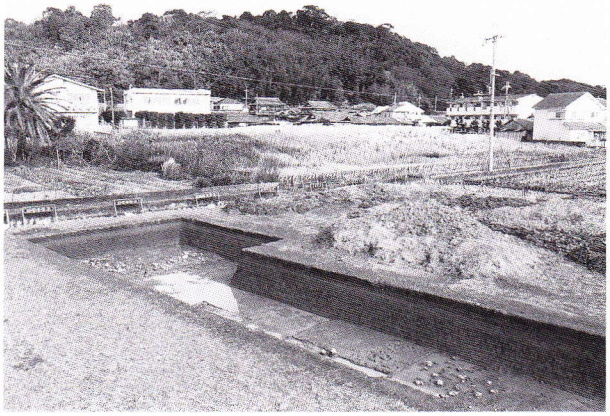
外堤については前方部同様に中世に大規模な削平を受けており遺存状態は悪いが、葺石を3.6ｍ分検出した。外堤の検出位置は従来の古墳復元案とは異なり、約4.6ｍ南の位置から検出した。外堤は葺石基底石の直上まで削平されており、葺石は基底石のみが原位置を保って検出されたが、全ては遺存しておらず、特に西側では多くが欠落している。封土の検出範囲は約1.5ｍであり、その南側は平坦面が続き、湧水層である細砂層の直上まで中世の整地層が堆積している状況である。

周濠内は底面までの掘削は行っていないが、部分的な掘削状況から粘土層は約10㎝の厚さで堆積しており、標高1.9ｍで湧水層に達する状況を確認した。

本調査で出土した遺物には埴輪、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、中世土師器、中世須恵器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器・石製品などの遺物が出土した。これら出土遺物の内、車駕之古址古墳の関係遺物は埴輪のみであり、その種類としては円筒形、朝顔形、形象埴輪が出土している。形象埴輪には蓋形埴輪



第5遺構面　遺構全体平面図


第5遺構面　全景（南西から）

前方部（西から）

の他、不明部材が出土している。

外堤（東から）

まとめ

本調査では車駕之古址古墳の築造面を含め、5面の遺構面を確認した。

第5遺構面では車駕之古址古墳の前方部・外堤及び周濠を検出したが、前方部・外堤については葺石基底石の一部のみが原位置を保っており、中世に大規模な削平を受けている状況が明らかとなった。前方部については従来の復原案に示された位置において南西端部を検出したが、外堤については従来の想定位置より約4.6 m南の位置から基底部を検出した。従来の古墳復原案では前方部隅角部の周濠幅は北側とほぼ等しく約6.4 mであったが、今回の調査成果から約11 mを測ることが明らかとなった。今回の検出位置から古墳の復元を試みると、前方部と外堤の南西隅角がほぼ一直線に並び、当古墳が厳密な企画・設計に基づいて築造されている蓋然性が高くなった。当古墳は古墳の主軸を境として前方部の左右幅が異なり、周濠幅も一定ではないなど左右対称には築造されていないが、中期古墳においては地形的に左右対称に地割りできる条件があっても非対称に築造されるものが多いとされることから、当古墳についても北側は地形的な制約と考えるよりは、当初から意図的に非対称に築造されたと考えるのが妥当である。当古墳は古墳南側ほど周濠幅が広くなる傾向があり、造り出しが南側にのみ存在することからも、南側からの側面観を強く意識したことが明らかであり、この点が左右非対称に築造された大きな要因であると考えられる。

第1遺構面から第4遺構面の各遺構面では、水田耕作に伴う溝群及び畦畔を検出した。遺構内からの遺物量は少ないが、層位に含まれる遺物の検討から、各遺構面の時期は第4遺構面が中世前期、第3遺構面が中世後期、第2遺構面が近世後期、第1遺構面が近世末期以降と考えられる。

古代において本調査地の位置する木本郷は、大安寺の初期荘園として領有されていたことが明らかであるが、荘園経営や開田行為の具体像は不明である。その後、木本荘は東大寺末寺崇敬寺を領家に東大寺を本家とする荘園として成立し、11世紀中頃から12世紀初頭に開発行為が行われたと考えられている。今回の調査成果では、第7層に包含されている遺物に「て」の字状の口縁形態を呈する土師器皿や黒色土器、古相の瓦器椀などの遺物が一定量含まれており、古墳を削平・整地し、当調査地周辺に水田開発が及んだのは12世紀を前後する時期であると考えられる。この年代は、文献史料から窺われる水田開発の年代とほぼ符合するものであり、注目できる成果であると言える。

以上のように、今回の調査成果からは車駕之古址古墳南西部の構造と水田開発の過程を含め、その後の土地利用の在り方を示す具体的な資料を得ることができた。（川口修実）

【参考文献】　『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成14年度－』　和歌山市教育委員会　2004年

【平成15年度（2003年度）】

7．旧中筋家住宅第5次調査

調 査 地　和歌山市禰宜148番地

調査面積　31㎡

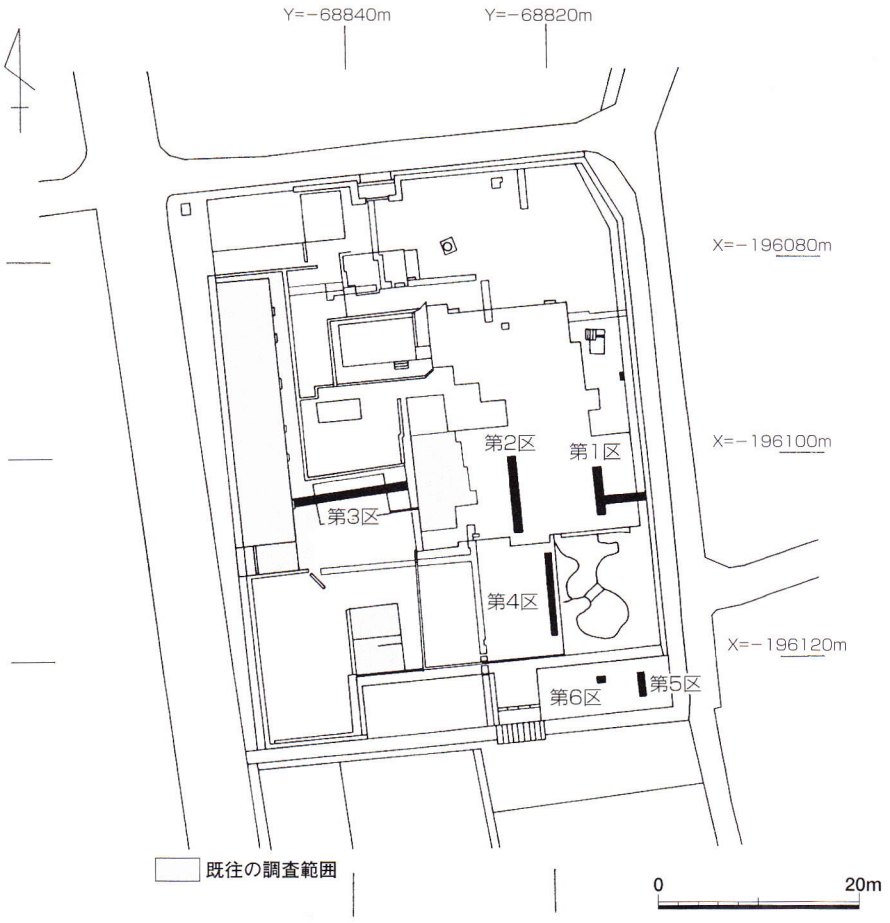
位置と環境

旧中筋家住宅は、国の重要文化財に指定されている建造物で、紀ノ川南岸、岩橋山塊から北方に延びる丘陵裾部に立地する。中筋家は江戸時代には和佐組の大庄屋で、その建物群は大庄屋の屋敷構えをよく残している。現主屋の創建年代については、近年の解体修理によって主屋に葺かれていた鬼瓦に紀年銘が確認され、嘉永5（1852）年頃と推定される。既往の調査としては、2000年12月に人力車庫を対象に第1次調査が、2001年5月に主屋土間部分を対象に第2次調査が、2001年10月から11月に長屋蔵とその周辺を調査対象に第3次調査が、2002年11月に主屋周辺を中心に第4次調査がそれぞれ実施されている。これら既往の調査において、現存建物の構築状況以外にも前身建物の遺構や敷地拡張の痕跡が確認されており、前身主屋の配置を示す古図や、天保14（1843）年の南へ二間、東へ一間拡張したことを示す文献との関連が注目できる。

調査内容

今回の調査は旧中筋家住宅の敷地南半部において、主屋内に2箇所、味噌部屋に1箇所、前庭の池西側に1箇所、表門に2箇所の合計6箇所の調査区を設定して行った。各調査区については、北東の調査区から第1～6区とした。

調査区全体の基本層序については、表土層（第1層）下に現存建物構築時の整地土（第2層）が堆積し、この上面にはタタキが施されており、現存建物に対する地表面にあた



調査位置図

る。その下層は現主屋や周辺のかさ上げ及び、現長屋蔵の位置する敷地西側への拡張に伴う盛土（第３層）で、その下層には前身建物構築に伴う整地土（第４層）及び盛土（第５層）がそれぞれ堆積する。

第１区（主屋内）全景（南から）

第１区は主屋に設定した２箇所の調査区の内、東側に設定した調査区である。調査は前身建物に関わる遺構の検出と、既存建物に伴う造成過程及び石垣・土塀の構築状況の確認を主目的として南北に4.8 m、東西に4.2 m、幅はいずれも80 cmの調査区を「T」字形に設定した。

第１区　前身建物礎石（南から）

まず主屋内の状況については、調査区北端部において地表下70 cmの地点から前身建物に伴うと考えられる礎石を１基検出し、この検出レベルまでの掘削を調査区全域で行った。礎石は一辺20 cm以上の結晶片岩を用いたものである。この礎石に伴う土層としては第４層が対応する。第４層上面は南・東石垣側がやや高いが（標高約9.2 m）、主屋中心部はやや低く（標高約9.0 m）、傾斜をもって堆積している。また、第４層上面のレベルは、主屋南側石垣と池との間に存在する石垣の天端と高さが合致し、現主屋に伴う石垣はこの石垣に追加構築されている状況が窺えることからも、この上面が前身建物時の旧地表面と判断することができる。既存の主屋の石垣は、この第４層上面から積み上げが確認でき、石垣を構築しながら建物内部側を現地表面まで50 ～ 70 cm程度かさ上げし、最上面に礎石を構築している状況である。

第１区（主屋外）全景（南から）

次に土塀については、敷地東端部の石垣に伴う裏込めが大規模に及んでおり、調査区のほぼ全域で確認された。ここでは第３層に対応する土層が堆積しておらず、主屋のかさ上げに際しては地表面をほぼ変えることなく、旧地表面上から現主屋に伴う石垣の積み上げ、土塀基礎の切石化に伴い旧石垣上部を一部改変し、再構築したものと考えられ、それに対応する土層として第２層が堆積している。主屋内で確認された第４層に対応する同一堆積は、土塀側では検出レベルがやや低く、標高約9.0 mで検出でき、東側に傾斜をもって堆積している。また、裏込めの礫中に混じって肥前系磁器染付瓶や瀬戸腰錆釉碗、土師質植木鉢、平瓦など18世紀代に比定される遺物が出土した。

第２区は主屋内に設定した２箇所の調査区の内、西側に設定した調査区である。調査は第１区と同様に前身建物に関わる遺構の検出と造成過程の確認を主目的として、南北に8.3 m、幅80 cmの調査区を設定した。

この調査区では、明確な前身建物に関わる遺構を確認することはできなかったが、現主屋かさ上げに伴う造成過程を確認することができた。まず地表下60㎝の地点（標高9.2～9.1ｍ）において硬化面が検出された。この硬化面は、検出レベルから第４層に対応する土層と考えられる。次に硬化面敷設後には、主要礎石下周辺に根石を構築しながら、山なりに２単位盛土を施す。山なりの盛土の内、下層に堆積する土層は黒色のシルト層であり、既往の調査では未検出の土層である。山なりの盛土を施した後、周辺部を南側から盛土・整地（２・３層対応層）を行い、主要礎石下では根石及び地固めをしながらかさ上げし、最上面に礎石が据えられる。また、最上面のタタキ面は一部において２面確認でき（タタキ（下面））、下面のタタキ層から切り込むホリカタをもつ礎石が存在することから、一部の礎石に限って礎石の据え直しとタタキの再敷設が行われていると考えられる。主要礎石下で検出された根石と山なりの盛土については、前身建物段階の遺構に伴う可能性も想定されるが、山なりの盛土が大きく２単位堆積している状況を勘案するならば、一連の造成に伴うと考えるのが妥当である。

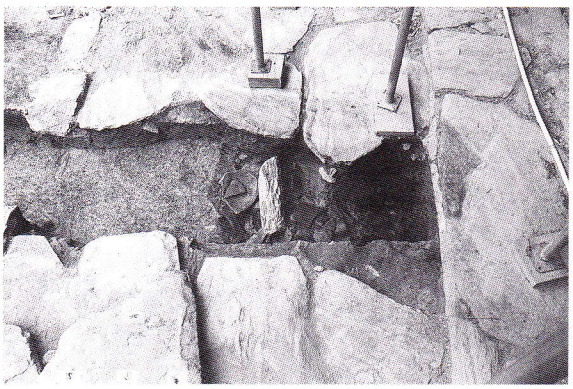
第２区　全景（南から）

第２区　礎石全景（西から）

第２区　土層堆積状況（南から）

第３区は、味噌部屋のほぼ中央部に設定した調査区である。敷地の西側への拡張・造成過程の実態を確認することを目的として、主屋と長屋蔵の間に東西11.1ｍ、幅80㎝の調査区を設定した。第３区では既存建物を含め、３面の遺構面を確認した。

第１遺構面は既存建物に伴う地表面に対応するものであり、長屋側では50～60㎝、主屋側では20～25㎝盛り土（２・３層対応層）を施すことによって敷地西側への拡張及び地表面のかさ上げを行い、上部に味噌部屋・長屋蔵を構築している状況を確認した。



第３区　瓦溜まり（南から）

第２遺構面は、標高約9.4ｍで検出された遺構面で、調査区西側において、落ち込み状の土層堆積と調査区東端部において瓦溜まりを検出した。

瓦溜まりは、検出レベルの対応から第２次調査検出の瓦溜まりと同一遺構と考えられるものである。第２遺構面の年代及び、この遺構面における他の遺構の存在については明らかではないが、瓦溜まりの埋土が上層の堆積と類似することから、敷地西側への拡張が行われる直前の段階に廃棄されたものと考えられる。

第３遺構面は前身建物に伴う遺構面であり、第５層上面からホリカタを穿ち、構築された石組暗渠排水溝を検出した。暗渠排水溝は結晶片岩の板石を用いたものであり、側壁は１段積みで、底部の敷石は存在しない。排水溝の規模は幅約 20 ㎝、深さ約 15 ㎝を測る。暗渠排水溝は北端部までは及んでおらず、調査区東側は東端部において結晶片岩の石材を用いた石列を検出したが、その間は石材が散乱している状況である。この暗渠排水溝が機能していた段階の地表面は第４層上面（標高 9.2 ～ 9.1 m）であり、調査区東端部においてタタキ面を検出したことから、第４層上面が前身建物時の旧地表面と考えられる。また、この第４層上面において敷地境を示す落ち込み状の土層堆積と溝状遺構（溝１）を検出した。

第４区は池の西側石垣上面に設定した調査区で、南北８ m、幅約 70 ㎝を調査対象として実施した。第４区では、塀の存在した可能性が考えられたことから、それに関わる遺構の検出を目的として実施したものである。

第３区　第３遺構面全景（西から）

第３区　石組暗渠排水溝（南から）

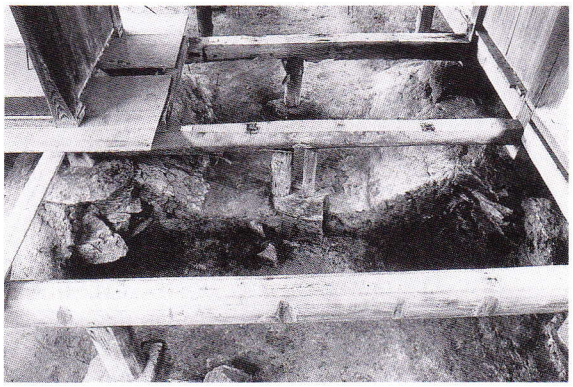
第４区　全景（東から）

調査は現代の堆積土を除去した結果、調査区西側において長さ 10 ～ 50 ㎝大の結晶片岩を用いた板石列と、タタキ面を検出した。タタキ面は板石列と切石の間において検出したが、調査区南側は撹乱のため遺存していない。板石列は敷地かさ上げ後の整地土と併行して敷設されていることから、塀に伴う基礎構造と考えられ、タタキの見切りのような性格が想定される。

第５・６区は表門東側における亀腹状遺構を対象に、その実態を確認することを目的として、断ち割り調査を行なった。調査区は、第５区が南北 2.5 m、幅 70 ㎝、第６区が東西南北ともに 80 ㎝の調査区を設定した。

調査の結果、亀腹内は灰色の粘土ブロックを積み固めて構築されており、内部には現礎石下に２段程度の根石と、さらにその下に大振りな石材を用いた礎石（旧礎石）の存在が確認された。また土層観察の結果、亀腹に伴う堆積土下において一部旧タタキ面の痕跡とみられる石灰層がみられ、

このレベルと旧礎石が一致することから、この上面が旧床面として機能していたことが判明した。また、一部南側に断ち割り調査を実施した結果、旧床面が南端の石垣の内、結晶片岩を用いた石垣の天端と合致することが明らかとなった。このことから表門は既存建物以前に、結晶片岩のみを用いた石垣と旧礎石によって構築された段階（標高約9.3 m）が想定され、表門建て替え時において、主要礎石周辺及び切石の積み増しに伴う建物周縁部のみをかさ上げし、同規模に建て替えが行われたと考えられる。亀腹状遺構は、この建て替えに伴うかさ上げに際し、主要礎石の積み上げを擁護する目的で構築されたものと考えられる。


第５区　全景（東から）

第５区　断ち割り状況（北から）

第６区　全景（南から）

今回の調査で出土した遺物は、各調査区において、主に整地・盛土層である第２・３層から出土したものであり、遺物収納コンテナ約７箱分が出土した。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世陶器、輸入陶磁器、近世陶磁器（瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、堺焼、丹波焼など）、瓦、石製品（砥石・石筆・碁石）、土製品（土人形）、金属器（鉄釘・銅製火箸・銭貨）や自然遺物（炭・貝類・桃核）がある。

まとめ

今回の調査は敷地南半部において６箇所の調査区を設定し、前身建物に関わる遺構の検出と、敷地西側への拡張・造成過程の確認を主眼として調査を行った。まず前身建物に関わる遺構として、第１区北端の礎石や第３区石組暗渠排水溝・タタキ面、第５・６区の亀腹状遺構内の旧礎石などを検出した。特に第１・３区の状況から、前身建物構築に伴う盛土（第５層）が完成した段階で礎石の据え付けや石組暗渠排水溝を構築し、その後整地（第４層）が行われるという過程が考えられる。この第４層上面が前身建物時の旧地表面と考えられ、標高9.0 ～ 9.3 mを測る。また、第４次調査では未確認であったが、本調査第５区の状況から表門についても敷地の拡張に伴って同規模に建て替えが行われたと考えられ、亀腹状遺構については前身建物から現建物への建て替えに伴う遺構と判断できる。

次に敷地の西側への拡張については、第３区第４層上面において敷地境と考えられる落ち込み状の土層堆積や溝状遺構（溝１）を検出したことにより、前身建物時の敷地の範囲を明らかにする直

接的な資料を確認することができた。今回の検出位置から想定される敷地の範囲は、古図に描かれた敷地の範囲とほぼ符号する成果であると言える。敷地西側への拡張は、第３区の土層堆積状況から、溝１以西では50～60㎝、以東では20～25㎝盛土・整地（第２・３層）を行い、現敷地に造成・拡張を行っている状況である。

解体修理に伴う旧中筋家住宅の調査も今回で５次を数えるに至り、５次の調査により概ね敷地全体の造成過程を把握することができるようになった。５次の調査で検出された主な遺構と造成過程の段階及びその検出位置を検討し、既往の調査成果もふまえながら、以下にその造成過程について考えてみたい。

まず１期として、前身建物構築に際し盛土（第５層）が施されるが、それに併行しながら用水路を伴う敷地南・東端石垣の構築が行われると考えられる。盛土については、第４次調査第６区の成果により、盛土最上面の標高9.3ｍから標高8.7ｍまで60㎝以上の厚さを測ることが確認されており、大規模な造成が行われているとみられる。また、上面のレベルから池及び前身主屋南側の石垣・石積みもこの段階と併行して構築されていると考えられる。主屋・表門など前身建物の主要礎石はこの段階で設置され、第５次調査第３区主屋西側の石組暗渠排水溝の構築が行われる。この段階において敷地北端の石垣も構築された可能性があるが、明らかではない。

２期は、前身建物構築時の地表面に相当する整地土（第４層）が施される段階である。この段階では土塀基礎や、土壇状遺構が構築され、敷地西側の境に溝が掘削される。また、第５次調査第３区及び同５区においては、タタキがみられることから、最終段階としてタタキが旧敷地全面に施されるものと考えられる。

３期は、旧敷地から現敷地へ拡張が行われる直前段階と考えられ、主屋西端から主屋外にかけて瓦溜まりが形成される。この上面が一時期地表面として機能していた可能性もあるが、瓦溜まりの埋土は上層に堆積する第3a層と酷似することから、現敷地へ拡張が行われる直前段階に前身建物時に使用されていた石材や瓦類の整理・廃棄が行われたと考えられる。

その後、４期として敷地西側への拡張・造成、主屋内及び周辺のかさ上げに伴う盛土（第3a層）が施される。盛土は主屋周囲の石垣及び池西側の石垣、長屋と茶室の間で検出された石積み遺構、現人力車庫周囲の石組溝など基礎構造の構築と併行しながら施され、盛土の最終段階において主屋・御成門・長屋などの主要礎石の据え付けが行われる。また、第２次調査では盛土最上面において焼土坑が検出されたことから、一時作業面として機能していたと考えられる。

５期として、整地土（第２層）を施す。この段階において土塀基礎の切石化や主屋礎石の配置、主屋土間竈の設置、表門亀腹状遺構の構築などが行われ、最終段階として敷地全体のタタキの敷設が行われる。

以上、既往の調査成果と検出遺構を検討し、前身建物段階から現敷地への拡張と、造成過程を上記の様に整理することができる。前身建物時の年代については、出土遺物より18世紀代の遺物がまとまりをもって出土することから、その頃には存在していたと判断できる。また、第２・５次調査検出の瓦溜まり及び第４層出土遺物の内、オランダ呉須による染付磁器が年代の下限を示しており、19世紀後半代に現敷地への拡張が行われたと考えられる。（川口修実）

8．木ノ本Ⅲ遺跡 第10次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本751－3・4番地内

調査面積　90㎡

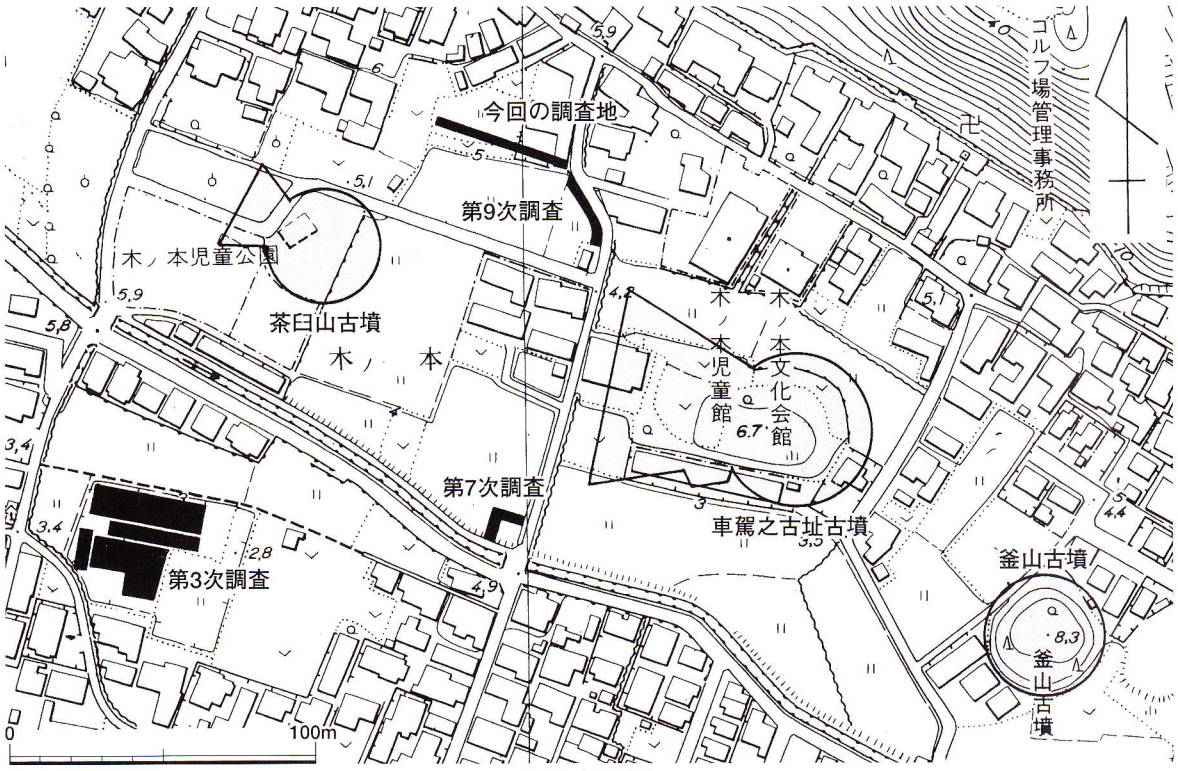
位置と環境

木ノ本Ⅲ遺跡は、和歌山平野の北東部、東西に連なる和泉山脈南麓に位置し、標高3～5mの沖積段丘上に立地する。遺跡の範囲は、国道26号梅原交差点を東端とし、県道西脇・梅原線を南限とする東西約1km、南北約400mに広がるもので、範囲内には木ノ本古墳群（西から茶臼山古墳・車駕之古址古墳・釜山古墳）が立地している。木ノ本Ⅲ遺跡においては、過去9回の発掘調査が行われており、今回の調査地は第9次調査地点の北側隣接地にあたる。第9次調査では2面の遺構面が確認されており、上面では江戸時代から鎌倉時代にかけての溝・土坑・柱穴のほか、土師器皿や和鏡が副葬されていた13～14世紀の土坑墓などが検出されている。また下面では、覆土に埴輪片を含み南側斜面に葺石状の礫群をもつ東西方向の溝状遺構が検出されている。この葺石状の礫群は、車駕之古址古墳北側外堤と推定されているが、溝状遺構の覆土から埴輪とともに瓦器が出土したことから、車駕之古址古墳の外堤を利用した鎌倉時代の溝状遺構とされている。

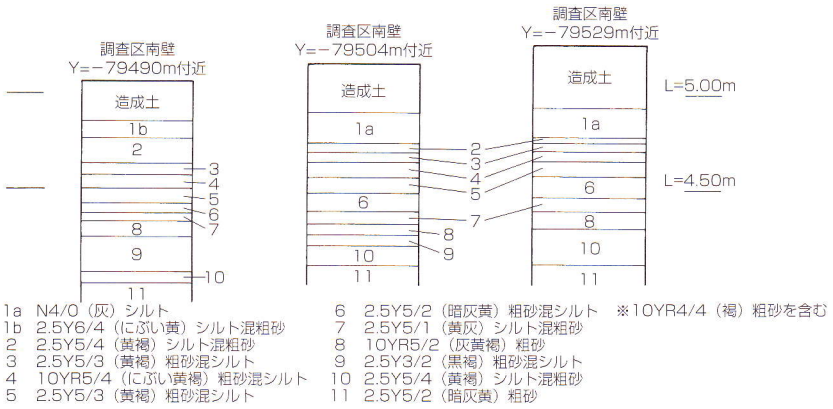
調査内容

調査地の現況は、造成された宅地である。調査は、深掘が予想される部分に南北2m、東西45mの東西に長い調査区を設定し行った。

調査地の基本層序については、まず調査区の全面には現表土である造成土が堆積している。この第1層は、調査区中央東寄りにあるコンクリート擁壁を境に東西でその土質が異なるが、ともに第



調査位置図



調査地土層柱状模式図

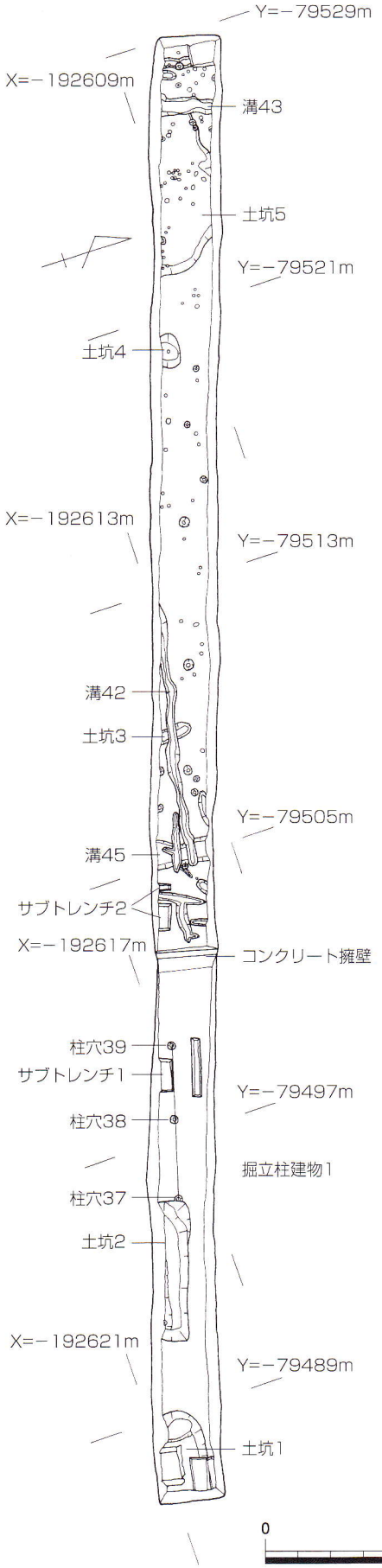
2層の上位に堆積するものであることから第1a・1b層とに区別する。第1a層は、コンクリート擁壁の西側に堆積するもので灰色のシルトであり、第1b層は東側に堆積するものでにぶい黄色のシルト混粗砂である。また第2層は、黄褐色のシルト混粗砂で第1層に伴う床土と考えられる。第3・4層は、ともに黄褐色の粗砂混シルトであり、近世の耕作土とその床土と考られる。第4層下の堆積については、調査区の全面に第5～8層がみられる。これらは、第5・6・7層上面において耕作溝を多数検出したことから、畑作にかかわる耕作土と考えられるものである。土質及び土色については、第5層が黄褐色の粗砂混シルト、第6層が暗灰黄色の粗砂混シルト、第7層が黄灰色のシルト混粗砂、第8層が灰黄褐色の粗砂である。これらの堆積の時期は、各土層に土師器・瓦器などが含まれ、第8層からは14世紀前半と考えられる東播系須恵器が出土していることから、鎌倉時代後期以降のものと考えられる。第8層下については、調査区の中央から東側にのみ黒褐色の粗砂混シルト（第9層）が堆積しており、西側にはその下層の黄褐色のシルト混粗砂（第10層）がみられる。この第9層は、サブトレンチ1・2及び遺構壁面の観察から、東に向かって厚く堆積しており、また第10層上面は東に向かって傾斜していることを確認した。この第9・10層上面では鎌倉時代の溝や土坑、柱穴を多数検出した。さらにその下位の第11層は、暗灰黄色の粗砂であり、調査区の全面に堆積するものである。第9～11層からは遺物が出土しなかった。

遺構は、今回の調査において第5層上面（第1遺構面）、第6層上面（第2遺構面）、第7層上面（第3遺構面）、第9・10層上面（第4遺構面）の合計4面の遺構面を確認した。このうち第1・2遺構面については平面的な調査ではなく、調査区壁面の土層堆積状況の観察によって確認したものである。以下、平面的な調査を行うことができた第3遺構面及び、第4遺構面において検出した主な遺構について古い時期のものから順に説明する。

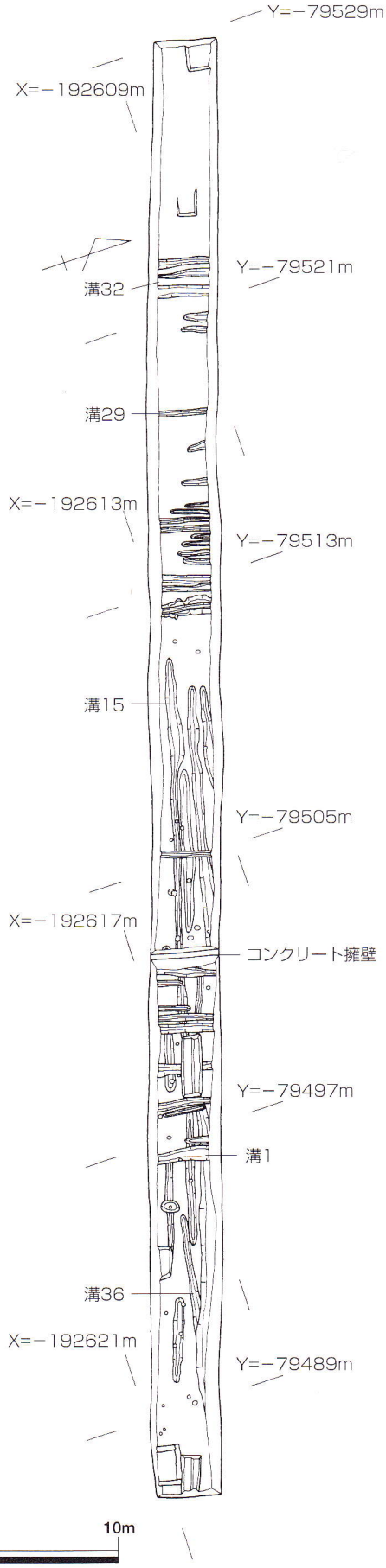
第4遺構面では、鎌倉時代の溝・土坑及び、柱穴・杭穴を多数検出した。

掘立柱建物1は、調査区の東側において検出したもので、ほぼ東西方向に並ぶ柱穴を3基（柱穴37～39）検出した。これらの柱穴の直径は約22㎝を測り、柱間の距離は平均2.4ｍを測る。

溝42は調査区の中央部において検出したもので、検出長8.1ｍ、幅16～40㎝を測る。またその方向性はやや蛇行するが、N-80°-Wである。覆土は灰黄褐色の細砂混シルトであり、縄文土器の他、土師器・瓦器を含むものである。遺構の時期については、出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

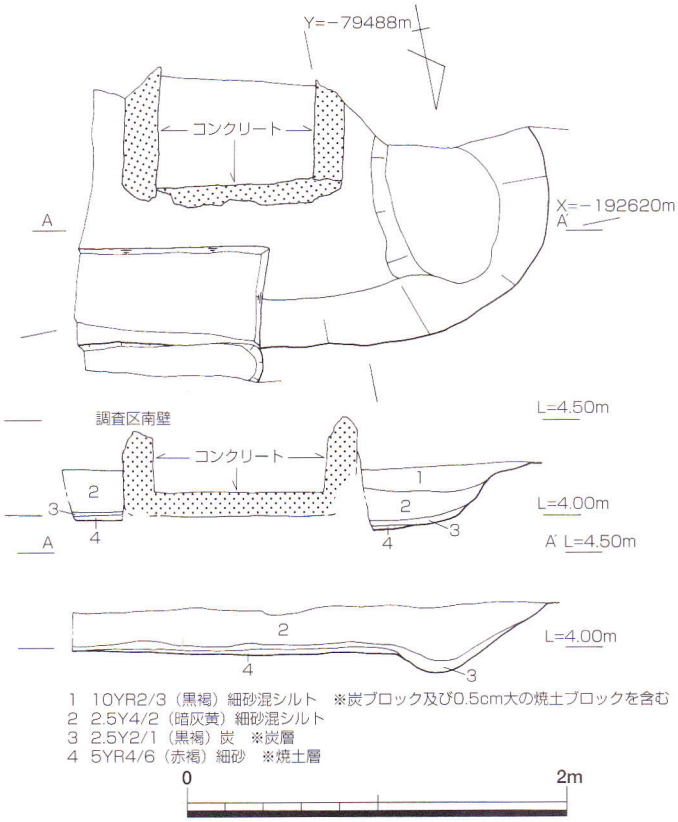


第 4 遺構面遺構全体平面図



第 3 遺構面遺構全体平面図

土坑１は調査区の東端において検出したもので、東側及び南側は調査区外へと続くものである。また現代の撹乱等の削平によって正確な規模は不明であるが、東西2.5m以上、南北1.3m以上、深さ20～36cmを測る。覆土は４単位に分けられ、第１層は黒褐色の粗砂混シルト、第２層は暗灰黄色の細砂混シルト、第３層は炭層、第４層は焼土である。このうち第１層は、調査区南壁土層堆積状況の観察では確認できたが土坑の北側においてはみられなかった。また、土坑底面は西側が一段低くなっており、この部分には焼土がみられず炭が約７cmの厚さで堆積していた。



土坑１　遺構平面図及び断面図

この遺構の性格としては、底面に焼土がみられ炭が全面に堆積することから、土坑内において火を使った可能性が指摘できる。このことは、第９次調査において確認された土坑墓と何らかの関係を想起させるものである。また遺構の時期について、第２層から土師器及び瓦器が出土したことから鎌倉時代と考えられる。

土坑２は土坑１の西側において検出したもので、南側は調査区外へと続くため正確な規模は不明であるが、東西4.3m、南北96cm以上、深さ51～75cmを測る。覆土は３単位に分けられ、第１層が灰褐色の粗砂混シルト、第２層が黒褐色粗砂混シルト、第３層が暗褐色の粗砂である。この土坑の東端部分において、第２層からほぼ完形の瓦器椀１個体が正位の状態で出土した。この遺構の時期については、出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

第３遺構面の遺構では、鎌倉時代後期以降のものと考えられる溝、及び柱穴・杭穴を多数検出した。遺構面の標高は4.3～4.4mを測り、西から東に向って傾斜する。

第７層上面において検出した溝群は、東西方向ものと南北方向のものとがある。まず東西方向のものは幅15～40cm、深さ約２cm前後を測る。またその方向性は、N-73°-Wを示すものが大半をしめる状況であるが、溝36のようにN-79°-Wのようにやや西に傾くものもある。次に南北方向のものは幅10～40cm、深さ１～６cmを測り、その方向性はN-16°-Eである。これらの溝群の覆土は黄灰色の細砂であり、土師器・瓦器などを含む。よって遺構の性格としては、鎌倉時代の畑作にともなう鋤溝群と考えられる。

次に遺物については、第３～８層などの遺物包含層及び、遺構の覆土から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・黒色土器・瓦器・輸入陶磁器・国産陶磁器・土製品・石器・石製品が出土し、遺物の総数はコンテナで３箱である。以下、主なものについて記述する。

１・２は縄文土器である。１は深鉢の口縁部と考えられるもので、口縁端部内外面に沈線がめぐ

るものである。2は突帯文の深鉢である。口縁端部下方には刻み目をもつ突帯が1条みられる。

3～7は瓦器椀である。3は口径15.1㎝、器高約5.1㎝、高台径5.3㎝を測るもので、内外面の調整については外面に指オサエがみられ、内側面には平行線暗文、内底面に連結輪状文が施されている。4は口径15.0㎝を測り、外面の調整に指オサエの後にヘラミガキが施されている。5～7は瓦器椀の底部である。

8・9は東播系須恵器のこね鉢であり、9は口縁端部が上下に肥厚するものである。

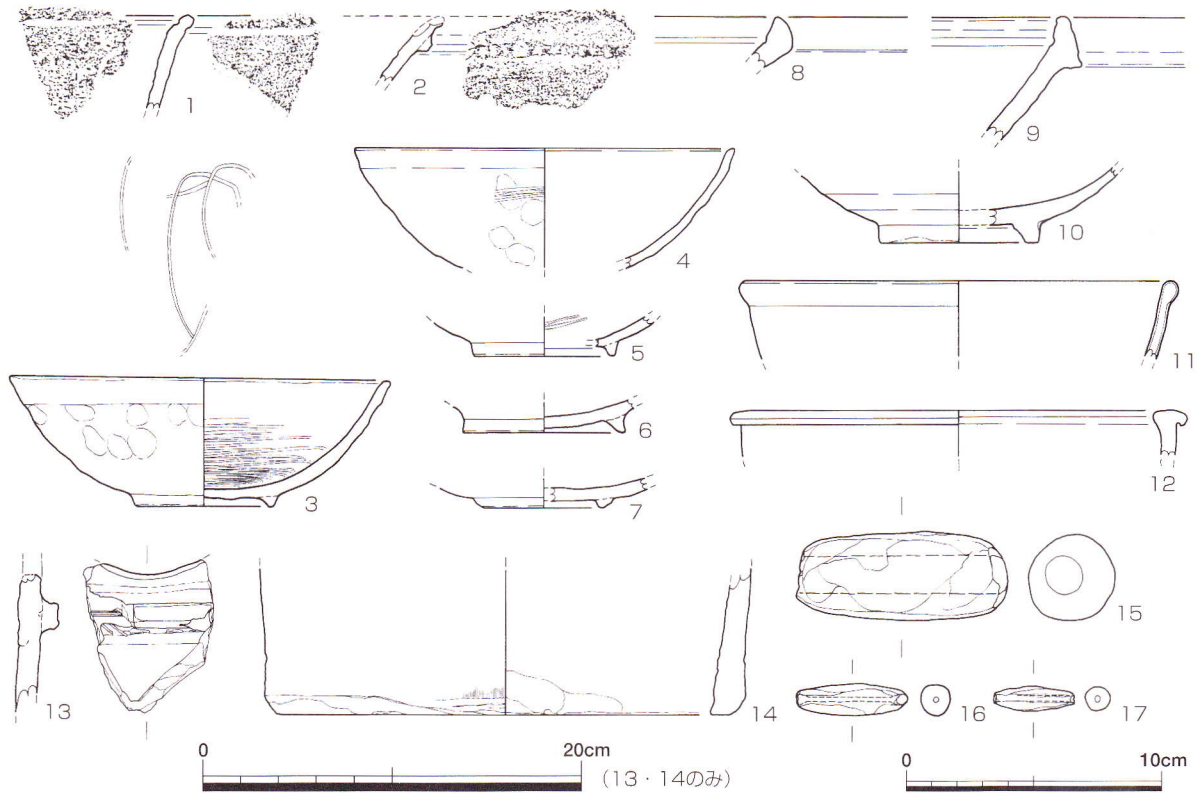
10・11は中国製磁器である。10は白磁の碗で、高台径6.0㎝を測る。器表面は、体部から高台外側面にかけて施釉されている。色調は2次的に火を受けて白濁色を呈する。11は青磁の碗で、口径17.3㎝を測る。器表面は全面に施釉されており、釉厚は1㎜程度である。

12は中国製陶器である。口径15.3㎝を測るもので、内外面には自然釉が付着している。

13・14は円筒埴輪である。13は胴部の破片であり、断面台形の突帯の上部に円形のスカシがみられるものである。突帯剥落部分の観察から、外面の調整にはタタキの後にナデが施され、突帯設定の技法として凹線が施されている。14は底部である。底径25.4㎝を測る。器面の調整は、外面の調整として僅かにタテハケがみられる。13・14の焼成は土師質で、色調は淡褐色を呈する。

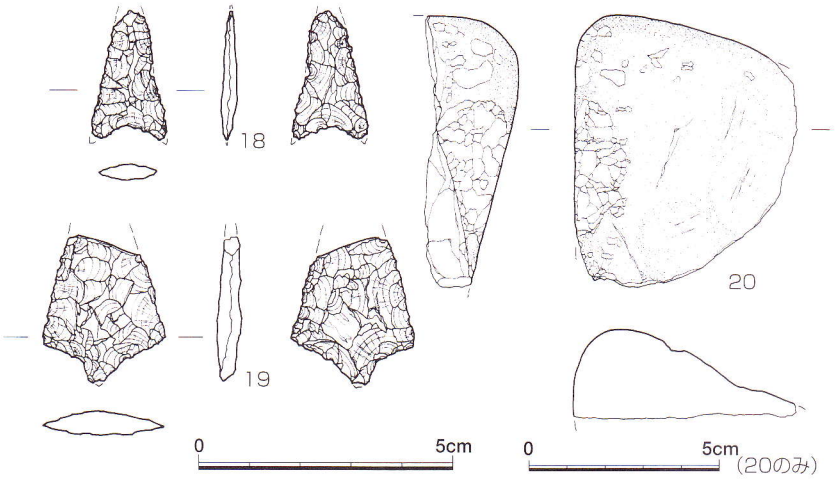
15～17は土錘である。これらはすべて管状土錘と呼ばれるもので、15は全長8.2㎝、最大径3.4㎝、重量83.4 g、16は全長4.4㎝、最大径1.2㎝、重量6.1 g、17は全長3.2㎝、最大径1.0㎝、重量2.3 gである。

18・19はサヌカイト製の打製石鏃である。18は凹基式のもので、全長2.6㎝を測り、重量は1.1 gである。19は凸基有茎式のもので、残存長2.9㎝、最大幅2.4㎝を測り、重量は3.0 gである。これらは表裏面ともに丁寧な調整剥離を施すものである。



遺物実測図1

20は砂岩製の叩石と考えられるもので、側端部に敲打痕が、また平坦部には擦り痕と凹みが認められることから、最終的に複合石器として利用されたものと考えられる。重量は106.8 gである。



遺物実測図2

これらの遺物について、1は溝42、2・6・7・9・16・19・20は第8層、3～5は土坑2、8・12・15・17は第7層、10・18は第10層から出土したもので、11は調査地内で表採したものである。また13・14は、調査地内の排土に含まれていたものであり、今回の調査地周辺に立地する車駕之古址古墳及び茶臼山古墳にかかわる重要な遺物と考えられるため図示したものである。

まとめ

今回の調査地では、出土した遺物のなかに円筒埴輪が若干含まれるものの、木ノ本古墳群に関連する遺構を確認することができなかった。ただ、南側隣接地で行われた第9次調査において検出された鎌倉時代の土坑墓に関連するとみられる遺構を検出した。まず第4遺構面で検出した土坑1は、底面に焼土や炭が堆積するもので、中世の埋葬行為にかかわる火葬遺構の可能性がある。また土坑2については、東西のホリカタが直線的で約4.3 mを測り、平面プランが方形を呈する可能性があることや、東端部分からほぼ完形の瓦器椀が出土したことからみて土坑墓の可能性がある。これらの遺構の時期としては、上位に堆積する第8層が14世紀前半であることや、出土遺物からみて13世紀後半から14世紀前半と考えられる。この年代観は、第9次調査の土坑墓から出土した和鏡の型式や、その他の出土遺物から得られた年代観と符号するものである。よって、これらは同時期に存在し、また今回遺構を検出した第4遺構面は第9次調査の第5層上面に対応すると考えられる。

出土遺物では、今回の調査において縄文土器が2点出土したほか、弥生土器も出土した。縄文土器については、縄文時代晩期のものとみられ木ノ本Ⅲ遺跡では初めての出土例である。よって、木ノ本Ⅲ遺跡は縄文・弥生時代から江戸時代にかけての遺物・遺構を含む複合遺跡であると考えられる。調査地周辺では、本遺跡の西側に隣接する木ノ本Ⅱ遺跡において、口縁端部を肥厚させその下端部に刻み目を施した縄文時代晩期の土器が1点出土している。木ノ本Ⅱ遺跡では、13～14世紀代の土師器・瓦器など含む遺物包含層が確認され、その上面において中世後期から近世の畑作に伴う鋤溝が検出されている。縄文土器は、最下層の沼状地形の埋土とみられる堆積土から自然木とともに出土した。よって今後、調査地周辺では縄文時代の遺構が確認される可能性がある。

（藤藪勝則）

9．　史跡和歌山城（しせきわかやまじょう）第28次調査

調 査 地　和歌山市一番丁3番地内

調査面積　200 ㎡

位置と環境

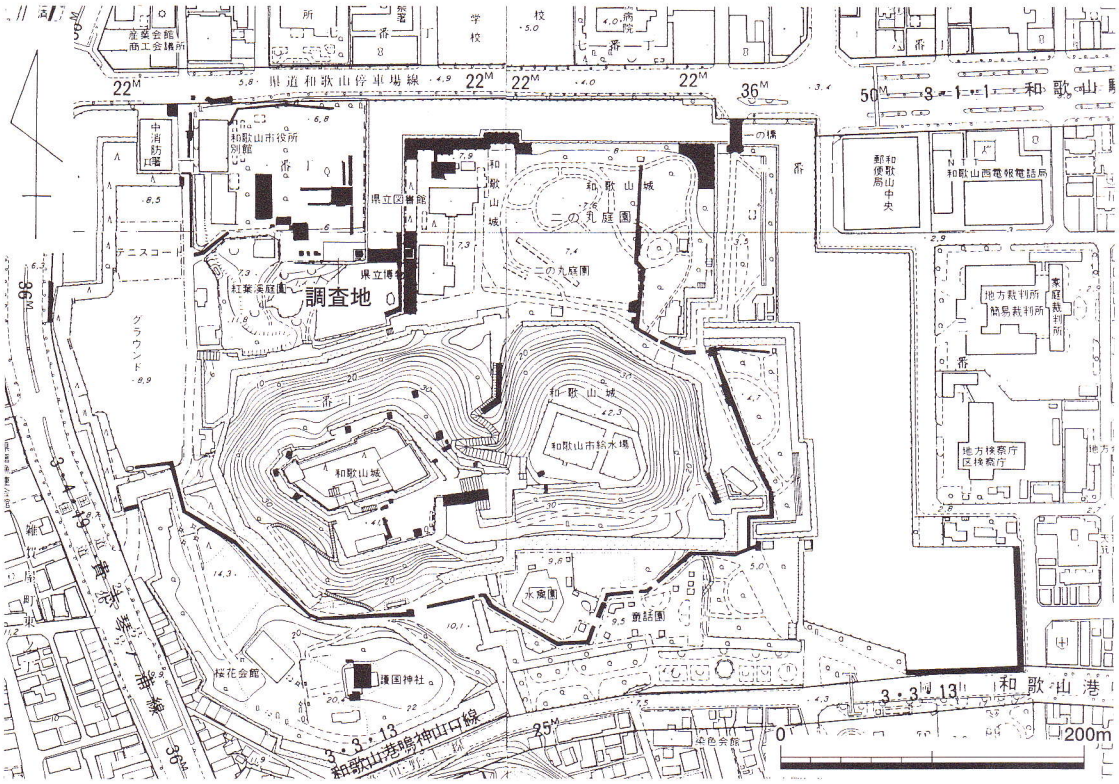
史跡和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。今回の調査は、和歌山市が史跡和歌山城地方拠点史跡等総合整備事業で実施する御橋廊下の復原整備に伴うもので、西の丸南西部において、今後の周辺整備における基礎資料を得るために発掘調査を行ったものである。

調査対象地である西の丸の様子を伺う絵図としては、『和歌山御城内惣御絵図』、『和歌山西丸図』がある。共に18世紀末ごろの様子を描いたとみられるもので、今回の調査地に相当する箇所には御橋廊下から西側へ続く通路の表現がみられる。調査はこれら絵図との対応に留意しながら行った。

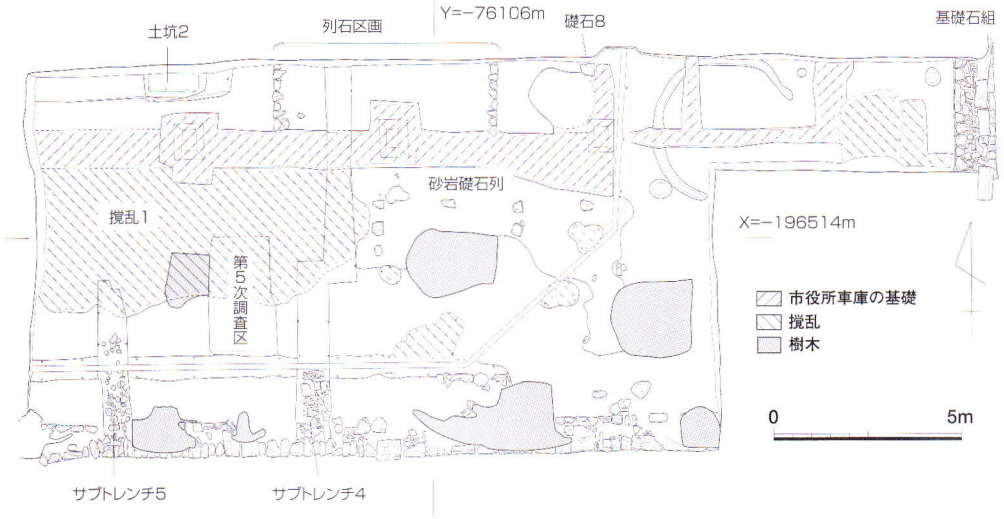
調査内容

調査区中央部には旧和歌山市役所車庫のコンクリート基礎とその撤去時の撹乱、送水管及び植樹の影響がみられ、場所により土質が大きく異なっている。おおむね近代以降の整地土は5層確認でき、近代と考えられる列石区画は第5層上面で、江戸時代と考えられる遺構は第6層上面で検出した。

第6層上面の検出遺構は砂岩礎石列（礎石8基分）、基礎石組1、石列1、土坑2、焼土坑3、溝状遺構1、土管1で、遺構面のレベルは砂岩礎石列周辺で約5.7ｍを測る。また列石区画下下層から切り込む瓦溜りを検出した。これらの埋没時期は瓦溜りが19世紀代、その他の遺構が明治時



調査位置図



遺構平面図

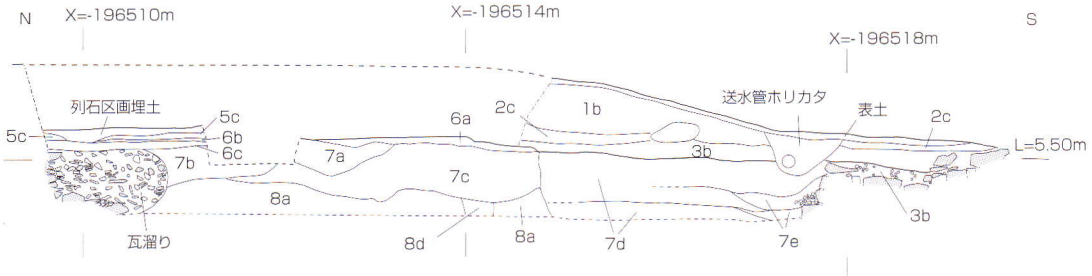
代以降と考えられる。

砂岩礎石列は調査区中央部において合計８基検出したもので、石材は全て砂岩である。礎石の間隔は、東西が1.8～1.85 m、南北が60 cmを測る。礎石４～７には被熱による変色がみられ、また周辺の第6a層上面にも一部火を受けた痕跡が確認できたが、この状況は上部構造が火災等により消失したため生じた可能性が考えられる。

調査区北西部において検出した方形の土坑２では、内部の壁面には板材・杭による木枠がみられた。木枠は腐食が進んでおり明瞭でないが、幅20～30 cmの板材を横向きに積み上げ、直径約５cmの円形杭で押さえる構造とみられる。埋土にはガラス片や産地不明の陶磁器が含まれていた。

瓦溜りは第7b層から切り込むもので、サブトレンチや撹乱部分でも部分的に観察できることから、少なくとも東西７m、南北1.2 m以上の規模を測ると推定できる。内部の堆積としては瓦がその約８割を占め、その他結晶片岩と砂岩が１割ずつみられた。陶磁器はわずかではあるが19世紀代の瀬戸・美濃系陶器が出土している。

また周辺の西の丸石垣構築の技法や時期、遺構面との対応関係を検討するため、サブトレンチを３ヶ所（サブトレンチ４～６）設定し掘削した結果、西の丸盛土に相当する第７・８層を確認した。



表土　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂
1b　10YR7/6（明黄褐）粗砂【植樹に伴う】
2c　10YR4/1（褐灰）細砂
3b　2.5Y5/4（黄褐）細砂
5c　10YR5/6（黄褐）シルト（漆喰片を含む）
6a　10YR4/1（褐灰）細砂混シルト
【焼土部分】5YR3/6（暗赤褐）細砂混シルト
6b　10YR5/6（黄褐）細砂
6c　10YR6/4（にぶい黄橙）細砂
7a　2.5Y6/4（にぶい黄）細砂（しまり強い）
7b　2.5Y6/4（にぶい黄）細砂
（直径2～5cmの砂岩円礫を含む）
7c　2.5Y6/6（にぶい黄）細砂（直径2～5cmの砂岩円礫を多く含む）
7d　2.5Y5/4（黄褐）細砂（直径2～5cmの砂岩円礫、結晶片岩を多く含む）
7e　2.5Y6/8（明黄褐）シルト
8a　2.5Y5/1（黄灰）粗砂（直径1～3cmの砂岩円礫を含む）
8d　2.5Y6/4（にぶい黄）粗砂
列石区画埋土　7.5Y6/4（にぶい橙）細砂

サブトレンチ４土層断面図

サブトレンチ４・５では、石垣から約２m内側に結晶片岩・砂岩の石組を検出した。北側に面を持つもので石材は４段確認できる。石組より内側には西の丸を構成する盛土と橙色の山土が版築状にみられたが、盛土内に含まれる遺物から、石垣の積み直し時期は19世紀代に下ると考えられる。

遺物は遺物収納コンテナに54箱出土しており、その大半が丸・平瓦や桟瓦等の瓦類である。土器・陶磁器類には近世の土師器、土師質土器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、堺焼、丹波焼、京・信楽系陶器、近現代の産地不明陶磁器、釘や鎹等の金属器、硯や石臼等の石製品、その他漆喰、貝殻、ガラス等が出土しており、中には弥生土器、土師器、須恵器等もわずかではあるが出土している。

まとめ

今回の調査では近代以降の撹乱が多く、遺構の残存状況は必ずしもよいとはいえない状態であったが、その中でも江戸時代末期から明治時代初頭の遺構として砂岩礎石列や土坑２を確認することができた。絵図と比較検討すると、砂岩礎石列は、御橋廊下から西側へ続く廊下の一筋北側に対応、土坑２は明治初頭の貼り紙にみられる厠周辺の施設に対応するとみられる。

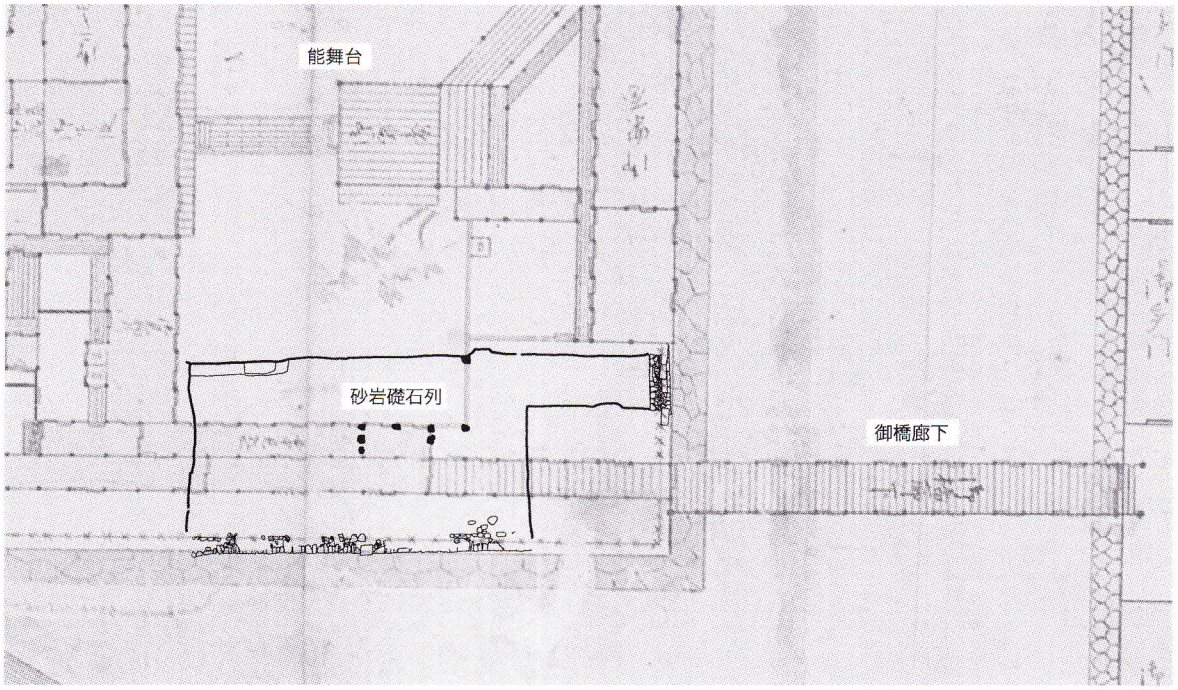
当該地周辺での火災の記録は明暦元（1655）年のみであるが、同一面の遺構の時期や出土遺物を考えると、砂岩礎石列の時期が明暦年間までさかのぼる可能性は低いと考えられる。現在のところ可能性のある火災としては二の丸の大奥から出火した文化10（1813）年の火災が挙げられる。第25次調査の所見からこのとき御橋廊下が全焼もしくは一部焼失したとみられるが、このとき御橋廊下と共に西の丸の一部も焼失した可能性が考えられる。今回検出された砂岩礎石列の火災を文化10（1813）年とみるならば、火を受けた礎石は『和歌山御城内惣御絵図』（寛永９～11（1797～1799）年）段階には既に据えられていたと考えられる。ただし、礎石列のなかでも火を受けていない礎石８は19世紀代の瓦溜りの後に据えられたことが明らかであるため、火災後の礎石再利用や部分的な据え直し等を考慮に入れる必要があろう。

なお『和歌山御城内惣御絵図』では、建物の間

全景（西から）

砂岩礎石列（西から）

土坑２（南から）



『和歌山御城内惣御絵図』と検出遺構の合成図
（絵図の間尺を1間=6尺（1.82m）としてS=1/400の遺構図と合成）

尺が1間＝6尺5寸（約1.97m）で描かれており、二の丸の調査でも遺構と絵図の間尺が合致していることを確認しているが、今回の調査で検出した礎石の間尺は1間＝6尺（約1.82m）と異なるものであった。西の丸部分についてはこれまでの検討でも現状と絵図が合致せず、西の丸部分の絵図の縮尺が実際と異なる可能性が指摘されていたが、1間＝6尺という調査成果はむしろ絵図の縮尺の違いを裏付けるもので、西の丸本来の間尺を示すものではないかと考えられる。

次に調査地周辺の石垣は、当初砂岩で築いていたものを結晶片岩で積み直しており、石材の違いによって積み直しが明らかである。また積み直しと断定はできないが、南面石垣中位にも目地が通る箇所が数カ所みられた。東面石垣の天端は現況で標高6.2mであるが、標高5.8mより上部3～4段は後の積み足しであり、解体工事によりその旧天端面も明らかになっている。この石垣の積み足しは基礎石組と同時に構築されたもので、西の丸の土地利用を勘案すると大正時代の公園整備に伴う可能性が高い。

石垣裏込の調査は第22次調査の東面石垣と今回の南面石垣の2ヶ所行われており、その構築方法には共通点が多いことが判明した。ただし、東面石垣は結晶片岩割石のみを裏込石に使用し、盛土から17世紀後半から18世紀前半の土器・陶磁器が出土しているのに対して、南面石垣は結晶片岩と砂岩を両方裏込石に使用し、盛土から19世紀代とみられる軒桟瓦、瀬戸・美濃系磁器が出土していることから、出土遺物の年代と裏込石材の違いが問題となる。東面石垣の改修時期が南面石垣に合わせて19世紀まで下る可能性も考えられるが、南面石垣の中位に目地が通る部分がみられる点や裏込石材が異なる点から、東面石垣の改修時期は18世紀代で、南面石垣については再度の積み直しが行われた可能性も考慮に入れておきたい。

（髙橋方紀）

10．和坂南垣内古墳群発掘調査

調 査 地　和歌山市禰宜1542番地

調査面積　6000 ㎡（対象面積）

位置と環境

和坂南垣内古墳群は紀ノ川の南岸、岩橋山塊東端部から北方に派生する丘陵端部、標高約37 mに立地する遺跡である。本遺跡の位置する丘陵部は、低い鞍部によって後背の丘陵とは分離しており、北側の平野部に突出した独立丘陵状の地形をなしている。和坂南垣内古墳群は現在まで遺跡として周知されておらず、地域住民の通知によって新規に確認された遺跡である。

今回の調査は古墳群の最も北側に位置する1号墳横穴式石室の天井石に使用されたとみられる巨石が石室上部に落ち込み、側壁が崩壊する危険があったため巨石の撤去と石室内部の調査を行い、遺構の保存を図ることを主目的に実施したものである。この他、新発見の遺跡としてその基礎的な情報を確認するために、古墳の位置する丘陵部全域の測量調査と小規模な発掘調査を行った。その結果4基の古墳を確認し、北側に位置するものから1～4号墳とし、調査にあたった。

調査内容

和坂南垣内古墳群の位置する丘陵部は、ほぼ全域が果樹園や畑として利用されているため、丘陵の東西両斜面には果樹園造成に伴う石垣が6段程度築かれており、北・西側の丘陵裾部は鶏舎建築や、北東部についても道路建設により削平され崖状を呈している。

古墳は丘陵部の尾根筋に築造されており、最も北側の頂部に1号墳、その南西隣に2号墳が、

調査位置図

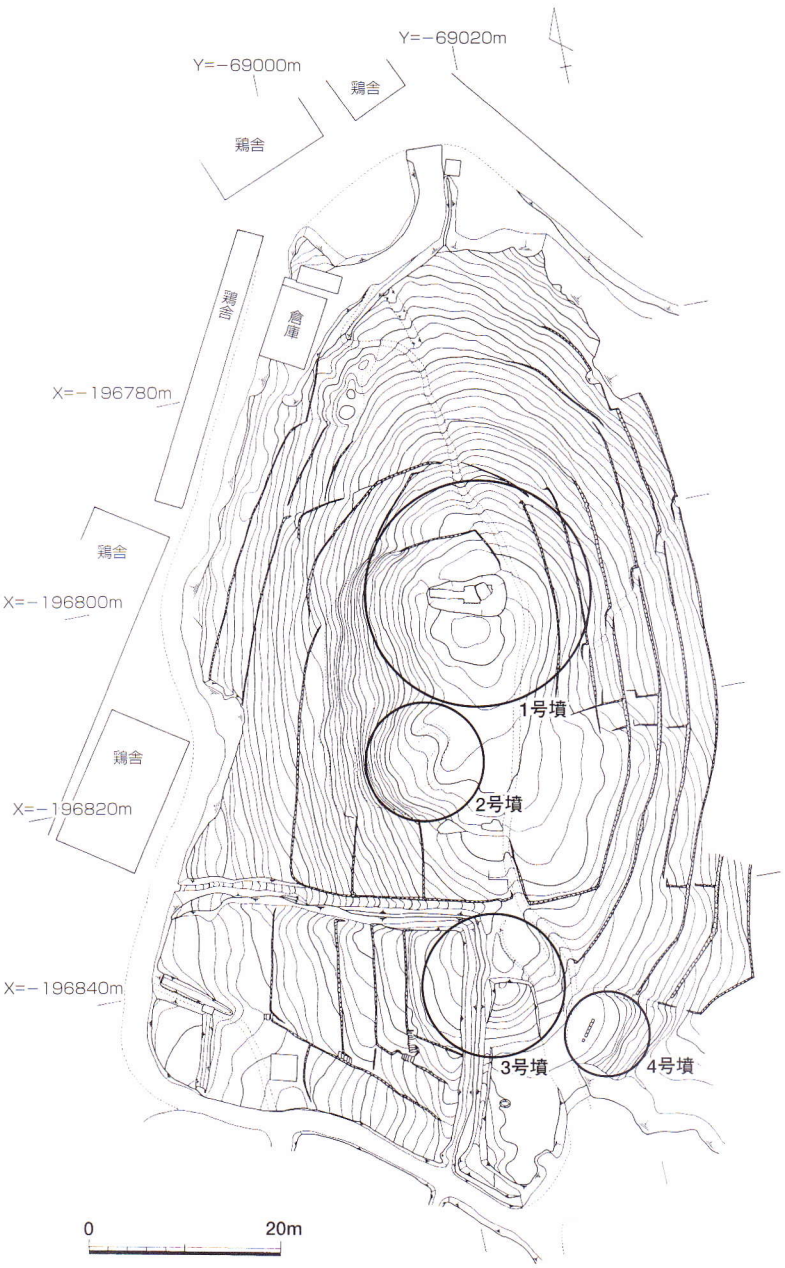
1・2号墳から南側に下った尾根上に3号墳、その南東隣に4号墳が位置している。

1号墳は北・東側が果樹園となっており、東側は盛土によって平地化されているために旧状を留めていないが、古墳の西側は大きな改変が認められず、遺存状態は良好である。古墳の北・南側斜面は削平や墳丘の流出によって平坦化しており、特に南側の斜面の勾配は非常に緩やかである。墳頂部には石室の主軸に沿って掘削された盗掘坑があり、坑内において石室壁面の一部が露呈している状況であった。1号墳は玄室の床面が34.20mであることからこの付近に墳丘裾部を求め、玄室中央を古墳の中心と想定し復原すると直径約24m、高さ3.2m以上の大型円墳となる。

1号墳　調査前の状況（西から）

2号墳は1号墳に隣接して位置しており、尾根筋でもやや西側に寄って築造されている。古墳の周囲は東・南側が果樹園となっており、特に東側は1号墳同様盛土によって平地化され、大きく改変されているが、西側は大きな改変は認められず、墳丘の遺存状態は良い。墳頂部は平坦化しているが、その西側において主体部の崩落した痕跡とみられる浅い「U」字形の落ち込みが認められた。2号墳は直径約12m、高さ3.0m以上の円墳とみられる。

3号墳は、2号墳の南東約11mの地点に築造されている。古墳上部は大きく削平されて平坦化しており、西側は土地境の土手や果樹園の造成により改変さ



墳丘及び周辺地形測量図

れているため旧状を留めている範囲は南側の一部のみである。3号墳は、遺存する墳丘南側から直径約15mの円墳と判断できる。

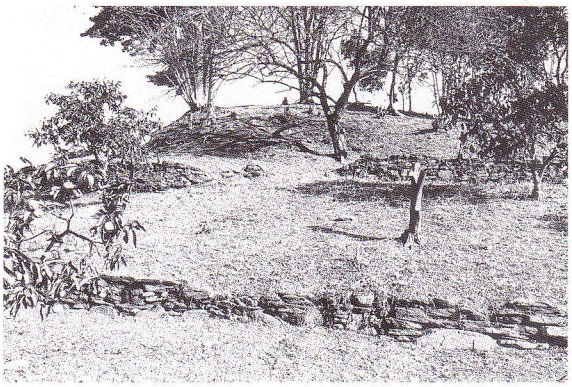
4号墳は、3号墳の南東に隣接して築造されている。上部は江戸時代後期から末期の墓地となっており、墳頂部から北側は平地化されている。墓地造成に伴う隆起の可能性も残るが、直径約9m、高さ約2.5m以上の円墳とみられる。

発掘調査は1・2号墳の墳丘上に3箇所の調査区（第1～3区）を設定し、実施した。

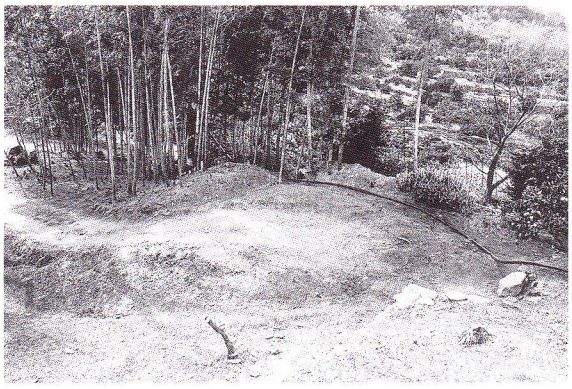
調査区の基本層序の内、第1区については玄室と羨道部において堆積土層が大きく異なっている。玄室から玄室前道部については、表土（第1層）下に近年の盗掘や撹乱において乱された際の土層（第2層）、円礫を多量に含む玄室床面の撹乱土層（第3層）が堆積する。第3層下面には断ち割り箇所において、原位置を保つ礫敷きの床面が確認され、その下層は標高約34.2mで岩盤層に達する。羨道部は表土下に、中世前期の堆積層が3単位（第4～6層）堆積し、その下層は古墳築造後から中世前期までに堆積した流入土（第7層）、床面構成土（第8～10層）であり、標高約34.5mで岩盤層に達する。

第2・3区の層序については、表土（第1層）直下に撹乱土（第2層）や墳丘流土（第3層）、その下層に墳丘構成土（第4・5層）や岩盤層がそれぞれ堆積している。

第1区は、1号墳の横穴式石室周辺に設定した調査区である。検出された横穴式石室は、西に開口する両袖式のものであり、全長8.18mを測る。石室の形態は岩橋系の横穴式石室であり、石室に使用された石材は床面の円礫を除き全て結晶片岩の割石を用いている。石室の構造について、玄室は長さ3.0m、幅2.05m、残存高1.61mを測り、石室規模は比較的大型の部類に属する。床面は円礫を敷き詰めた構造で、原位置を保つ円礫敷きの床面は南側のごく一部であり、過去の盗掘や掘削により大きく撹乱されている。玄室内部の施設と


1号墳（西から）

2号墳（南西から）


3号墳（北東から）

4号墳（北東から）

しては、棺台・棺障・仕切石を検出した。棺台は奥壁に接して設置されており、長さ1.9 m、幅1.0 m、厚さ15 cmを測る一枚石と2箇所の支石によって構成されている。棺台の前面には棺障が付属しているが、大半の石材が抜き取られており、僅かに南側壁にその基部が遺存している。仕切石は板状石材を使用し、主軸に平行して左右1組で構成されたとみられ、棺台同様に僅かに赤色を呈することから、赤色顔料が塗布されていたと考えられる。排水溝は玄室のほぼ中央部に主軸に沿って設けられており、岩盤を掘り込んだ素掘りのもので、蓋石等の施設はない。

第1区　全景（西から）

第1区　全景（東から）

玄室前道部は長さ1.18 m、幅80 cm、残存高85 cmを測る。基石には巨石を用い、側壁も他の部位に比べ大型の石材を使用している。玄室前道前面には、化粧石の残欠が残り、扉石により閉塞が行われたと考えられるが、扉石とみられる使用石材は抜き取られており、遺存していない。

羨道部は玄室の主軸に対して北側にやや斜行して構築されており、長さは北側壁で2.35 m、南側壁で2.41 m、幅は玄室前道の前面で1.25 m、羨門部で1.05 mを測る。床面は開口部にむかって高く傾斜している。側壁の基底部は、墓坑掘削時に岩盤を掘り残して基底部としている。排水溝は羨道部の中央よりやや南側に偏って設けられており、岩盤を掘り込んで敷設されている。閉塞は羨門部において行われており、板状石材を縦位に据え、前庭部に板状石材を横位に積み上げているが、その多くは盗掘時に除去されていた。

第1区　玄室・奥壁（西から）

第1区　玄室前道・羨道部（東から）

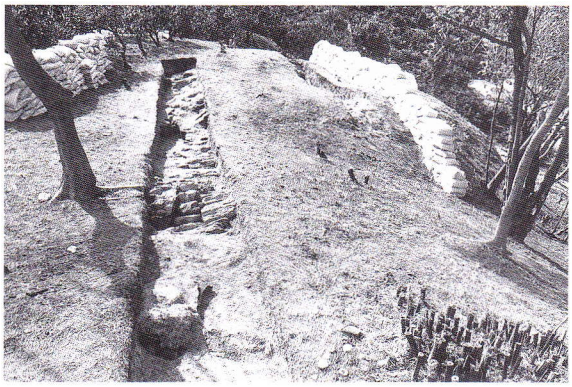
羨道前庭部は、長さが北側壁で1.65 m、南側壁で1.52 m、幅は羨門の前面で1.37 m、開口部で1.0 m、残存高は1.22 m以上を測る。羨道前庭部の壁面は、玄室や羨道部に比較して乱雑に積まれており、積み直しが行われている可能性が考えられる。この前庭部の前面には墓道が掘削されており、検出長1.4 m、幅2.0 m以上、深さは65 cm以上を測る。墓道については、閉塞石検出レベルまでの掘削に留めているため、下部構造に

ついては明らかではない。

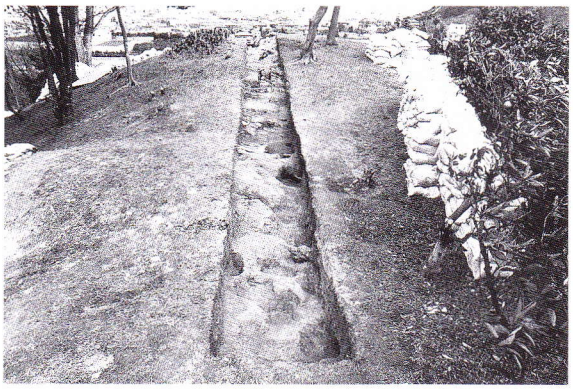
石室内からの出土遺物は、撹乱のため原位置を保つものはないが、玄室床面の撹乱土内から土師器・須恵器の破片、板状の鉄製品、鉄釘、ガラス玉の破損品が検出された他、棺台の欠損部から耳環が1点出土した。

第2区は、1号墳から2号墳の墳丘上にかけて設定した調査区である。表土層を掘削した結果、調査区北端の1号墳墳頂部においては墳丘構成土が検出され、その東側では大部分において表土下に岩盤が露呈し、その一部において墳丘流土や墳丘構成土が検出された状態であった。このことから墳丘はその大半が流出していると考えられ、墳丘裾部を巡る周溝などは検出されなかった。調査区南端の2号墳においては、表土下に撹乱土が堆積し、この下面で墳丘構成土が検出された。

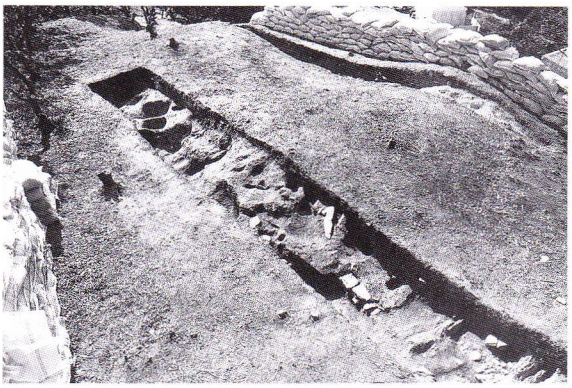
第3区は、2号墳の墳頂部で確認した浅い「U」字形の落ち込みが、主体部の崩落した痕跡である可能性が考えられたため、その有無を確認するために設定した調査区である。調査の結果、この落ち込みは盗掘坑であることが判明し、その底面において上部を大きく破壊された横穴式石室を検出した。横穴式石室は結晶片岩の割石で構築された岩橋系の石室であり、開口方向は南西で、1号墳とは主軸を異にする。玄室は長さ2.0m以上、幅90cm以上を測り、床面は円礫敷きであるが、内部を大きく撹乱されている。玄室前道の北側には排水溝の蓋石とみられる結晶片岩の石列を検出した。玄室前道部は長さ56cm、幅90cm以上を測り、本来化粧石が存在していたと考えられるが、抜き取られている。石室内部の出土遺物は、古墳の副葬遺物である須恵器杯蓋・高杯脚部が床面から遊離した状態で検出された他、中世の土師器片が出土した。2号墳で確認した横穴式石室は、1号墳に比較すると玄室前道基石が小規模で、床面の比高差が約90cmあり、高い位置に構築されていることから、小規模な石室であったと考えられる。



第2区　全景（北から）



第2区　全景（南から）



第3区　全景（北東から）

第3区　横穴式石室（南西から）

本調査で出土した遺物の内、古墳に関連するものとしては、1号墳から土師器壺・高杯、須恵器杯身・高杯・短頸壺・台付壺・甕・器台、耳環・鉄製工具などの金属製品、ガラス製小玉が出土した。2号墳からは須恵器の杯蓋・高杯、3号墳では表採された須恵器の杯蓋・壺の小破片がそれぞれ出土しているが、出土量は少ない。古墳時代以降の遺物としては、1・2号墳盗掘時の堆積層から中世土師器椀、瓦器椀・皿などが出土している。その他、表土層から肥前系陶器碗や同染付磁器碗・皿、銅緑釉の仏飯器、近代磁器碗・皿、瓦類や稲荷信仰に伴う土人形などが出土している。

まとめ

和坂南垣内古墳群は岩橋山塊から南に延びる丘陵端部の独立丘陵上に位置し、横穴式石室を埋葬主体とした4基以上の円墳から成る古墳群であることが判明した。各古墳の築造年代は、3・4号墳が出土遺物がなく明らかではないが、1号墳が6世紀後葉、2号墳が7世紀初頭頃と考えられる。

本古墳群周辺の古墳分布は、岩橋千塚古墳群から本古墳群周辺までの岩橋山塊には濃密な分布を示すのに対し、本古墳群の東に位置する高積山には古墳の分布がほとんど確認されておらず、それ以東の鳩羽山塊においても古墳の築造数が極端に減少する。これら高積山以東の古墳群については、石室構造などの様相が岩橋千塚古墳群とは異なるものであり、岩橋山塊と鳩羽山塊の間は高積山が障壁のように位置することによって異なる文化圏を形成していたことが窺われ、岩橋山塊の東端に位置する和坂南垣内古墳群は、広義の岩橋千塚古墳群の東端に位置づけることができる。また岩橋山塊と鳩羽山塊の間は名草郡と那賀郡の郡境にあたり、中世には本古墳群の東隣を熊野古道が通るなど、古墳時代においても交通の要衝であることが想定されることから、本古墳群の立地環境は極めて重要な位置を占めるものと評価できる。また1号墳の墳形や墳丘・石室規模、岩橋千塚と同型の埋葬施設が採用されていることからみて、その被葬者は国造級の大型前方後円墳、全長40m前後の小型前方後円墳に次ぐ階層で、これら首長層と強い類縁関係をもつ有力成員層とみられる。

次に1号墳の石室構造の内、棺台については岩橋千塚古墳群前山A 67号墳、同井辺1号墳、和歌山市山東22号墳や同鳴滝1号墳に類例がある。時期的には6世紀後葉から末葉の古墳に集中し、構造的にみて前山A 67号墳や鳴滝1号墳のように石屋形状の棺台から付属施設を伴わない井辺1号墳の省略形態へ変遷するものと考えられ、本例は井辺1号墳より先行し、棺台のみの省略形態へ移行する過渡期に位置づけられる事例と評価できる。仕切石については主軸に平行するもので、類例としては岩橋千塚古墳群内の天王塚古墳や有田市淑古墳においてその可能性が示されているが、本例は発掘調査によって原位置を保った状態で検出された唯一の例として貴重である。岩盤直上から据え付けられていること、石室自体が岩盤を掘り残して基底石としているなど、墓坑掘削時から極めて計画的に築造されていることから、追葬時に敷設したものではなく、構築当初から存在したものと考えられる。仕切石の用途としては棺の間仕切りであった可能性が考えられ、主軸直交葬1棺と主軸平行葬2棺が当初から計画されていたものと想定される。岩橋系の横穴式石室においては主軸直交葬が基本であり、主軸直交葬と平行葬が併存する複数葬の事例は、山東22号墳など極少数であり、本例は玄室内の諸施設から棺体配置の推察を行える事例として注目できる。（川口修実）

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成15年度－』和歌山市教育委員会　2005年

Ⅲ．普及啓発活動

1．書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第36集　『和歌山城跡 第9次発掘調査概報』　（平成15年3月）

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8』－平成12（2000）・平成13（2001）年度－　（平成16年3月）

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成13年度－（平成15年3月）和歌山市教育委員会発行

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成14年度－（平成16年3月）和歌山市教育委員会発行

2．報告会等の開催

和歌山市教育委員会と共催で報告会等を実施した。

和坂南垣内古墳群発掘調査現地説明会

平成16年2月21日　参加者約140名

3．速報展等の開催

和歌山市立博物館と共催で速報展を実施した。

『第5回和歌山市埋蔵文化財速報展「発掘物語2003」』

平成15年4月26日～6月15日　和歌山市立博物館　特別展示室

速報展に伴い調査報告会を行った。

『ミュージアム・トーク「スライドで見る和歌山市最新発掘情報」』

平成15年5月18日　和歌山市立博物館　講義室

『市博講座』　和歌山市立博物館　講義室

平成15年6月7日　「古墳の始まりとその伝播」

平成15年6月14日　「火葬の始まりと古代のお墓」

和坂南垣内古墳群現地説明会風景

平成18年3月31日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報9

－平成14年度（2002年度）・15年度（2003年度）－

編集・発行　財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　中和印刷紙器株式会社

©財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 2006

秋月遺跡 土器棺墓